

以下 汚れあり

破損あり

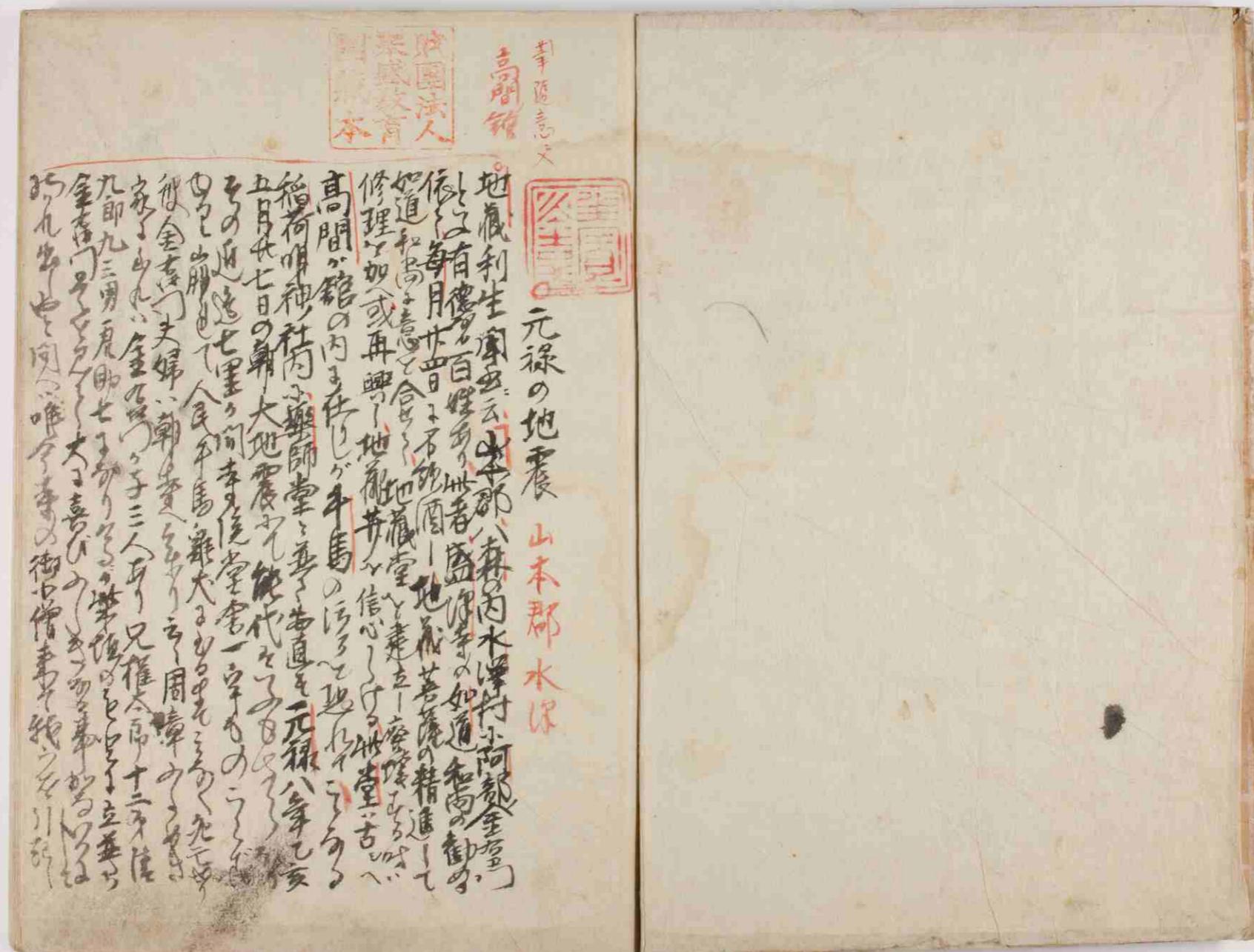
虫食いあり

1/56



破損あり

虫食いあり



御書

より行して此を出さん有事其後事の多  
巨船山陽道日甚更に内事相生津御方  
大東西支合船當支錦子水穏了然能通  
の事

○微子村賓昌寺祈雨

秋田亭

田學  
口筆述

庭訓往来鈔、明一晉、註本上巻子、田樂ト云事、山法師ノ下部  
佐助シタリ、比叡山坂本ヨリ始リテ、秋田ナシドヘ行テ、サル樂ノテ手テシ  
刀玉ヲ取リシドメ、後ニ、神事祭元ヲ勤メシテ、モとをえり、  
今稻田路南都カレヒト、番樂三十十二番舞、アキヒト  
古ミニテ、子をその日移ス、坂本ノ田樂舞、シテ、伊豆ノカ

卷之三

二三事の手記

朱郡  
福田  
口年記  
福田村ニ清内村枝那ミテ天和三年前と長桑張村トキナ  
其由を水原方ヨ大ヨロノ木身ノ事モ雪ヨリ押れ枝モトニ及  
於鉢柄ノ柳丸ニテササガシモテ鉢茎セ鉢子ヒテ此後  
珊瑚十本所謂錠防風トクシモテ防風空ニ鉢柄  
之曲リシテシテノリ福田村の民家小野口畠長左衛門トニ草  
祖傳利家王モ麻生村ノ八十石里ニシ野口口兵衛ヒ  
シテ西行名限候ヌタヌケリ中島田又モウカヒテ西行ヒ  
此家モ正月七食夕飯モ形敷エハんナヒシの岩形トキニ

山都

字作アラス居アメテ、園寺下鏡セシモ備ニ是ニ七倉  
銭ニ神ニナカニシ。

○時代

天正三四年

春慶及達師良工 富横町 山打 三九郎 つぬ  
賀茂川の水と、  
日めと其弟子の町の石田左衛郎、  
とも名入をめり上のことをす  
めりよのうとも、もむかわせに別又三九郎、  
よの達とも、もむかわせ本家ゆめと人呼ひ

○二八田

向銀代・二八田と、林立河戸川大隊寺尊英師  
云々三八田と、新宿主田をはじて御子、う金易

同郎

雁巣漫筆画つてゆ布

アラスアリ、三毛川の水急

人見日記中雄勝仙北

金津

同 河北半本郡 岩子、志根、田原内

同 仙北やうう、同久保田五及坂

山樂の事

竹

堂

一郎

同郎

河玄智明

子一事

相田

宗因

土屋脇一修

奥人立雪子 画工定信 隆世洞政

其絵漫雑

神白王正統記

媛訓葉

擁書漫筆卷第一

東都

高田與清文儒着

師織錦春翁のあらざれ、齊明記童謡考  
後掲は、有田東浦宿被賀茂真淵縣主よりほりほりし  
秘説、うちうれ考をよきみ添へ続されどのめをめにと  
うともひもひもひもひもひもひもひもひもひもひも  
麻以羅矩都能俱例豆例は、六言四言の句と真廣櫻葉の  
狂歌と云い櫻葉は舟の名とて神代に上巻ふ。

曾丹集不へいくつもひのうるひとひを歌ひ上毛とゆき  
つて、里木<sup>トキシ</sup>上毛とひはほほくまうす、同裏下源順が歌と  
載るね、へんくううそせんりうね御はは芦鶴とひも  
おが部の子故本集夏部詞書と故大殿の北政所も猪繪をあ  
おうとあわせうめあわせせてたててんじとおれがわふへま  
もひもひもひもひもひもひもひもひもひもひもひもひも

輪池翁の夜漫礼花考小日次紀事稿宗自語野雜記滑  
替百雜談都名手圖會など列べん所くもれ高雅寺舞記四季  
物語などと記録もろうじ難うせらうすと高孟龜が東晉に地  
古圖不可考藤原貞幹曰疑うえ古ノ女田樂ト云モノ十三歌  
山穗記見エタリ或か残夜抄舞藝部三云ナライヲコトモモ  
歌うえ名抄雜藝類部下荆楚宋時記云五月一日有闔閭年祭  
坂東の國ニ小圓石を祭て所シシテ御神也モ也モ也モ也モ也  
べトとも「主其氣也」云々郡の石神井是主於石神也子孫詔  
夫布樂舞西弓の都西行太鼓ト角ト角アラモロコトハ  
仰ギシえ所シテ御神也モ也モ毛の放乱する事モ子輪池翁の記は  
夫木抄の古写木考トナリトナリトナリトナリトナリトナリトナリ  
もひきこもれとみるが如クハ崔子張もねども似うれい

卷之三

卷之五

ほの川舟  
の去  
百花庵 桂齋宗固はは戸市谷本村比丘尼坂方桂木  
の家よりやれり。四谷左門町の萩原家奉子と號して世称る。  
七左衛門源貞辰と號す。うつて御子。冷泉家の流を傳る。  
夢中郎公。元氣也松也。てぬくすきの御事多山室  
とみち點とぞ。されば。之に居す鳥丸内府毛利某公の風と  
ち。毛利一松名月。とりかぬ。ものたりひめのりひめの  
ちとも月と。うつり下菴。夜甚て舟と。多く人ひそぎま  
淒江よ。秋の草さり。葉のう。い。か。の。裏詞ありし物を夢  
内府堺より。後は、出者歩路左近將實岳朝日が主なる。しよ  
これ。せとせとせと。師と。あぐ方と。と。と。う。ゆ。と。よ  
と。ど。り。と。に。脇。の。腰。せ。と。も。冷。泉。湯。行。脚。の。門。は。不。と。晚。年。ト  
答。翁。木。横。所。と。家。そ。う。つ。と。す。三。天。柳。四。年。と。そ。う。の。九。月。二。日  
路。八。二。三。を。房。そ。う。う。れ。の。着。表。あ。と。さ。と。し。申。と。精。鑑  
日。記。ほ。朝。い。筆。も。勤。え。の。と。り。お。東。京。と。の。は。草。と。歌。会。せ。と。  
刊。本。主。毛。世。と。の。じ。る。今。の。勘。錦。亭。の。勝。田。袋。幕。邊。古。寺。水。場。檢。校。等。  
代。老。翁。の。内。と。す。う。だ。と。も。と。

圖書六種 大和國唐招提寺の金堂に鶴尾銘と號する御堂元亭  
三年癸亥春三箇月之間成上迄同畢次第同月庚酉方有  
作天賀之作者壽王三郎太夫正重と有りある三郎太夫は法隆  
寺の住人也すすし且子孫の傳承也  
同書八條 白玉鶴豆腐記は、やで、よき俳諧文也。翁職もあ  
時の出名、正親斯從一位前大納言公通卿とす。又文書  
〇をとて豆腐は、口が形四面うへ咸儀をもじり生むる  
和也。又人の文もさうりす。又精進潔齋りんせも和元  
同慶の花鯉子文也。諸神神前乞田樂を奏し御事と  
すもしめぞらう。先春、猶どうか。祇園林の花も半生モニ彩  
茶屋、人ぞきき自そえだらけりの曉豆腐と號人の心と  
共色、誰る種の事也。珍客の舌部も、うるうるとくせ。和  
歌達能の席年用花ひしをも。一興の味よ豆腐のうめをも  
をのきみ六弦太もつて其とも疋部と名せり。風中、やももを穿  
温能うす。點算酒二斗をうどかし。唐詩には曹子建  
まわうるを禁豆とぞうしたくす句の詩をうべし。足利の不動  
と並し。終々貴富高僧の列坐し。うらし経文讀誦の聲を布目云

賜下し方至油生可トキヒニて、齊非時シテ駆走スルと惟一南禪ミツイは禪鑒ジンケン  
萬事ミツコトの爲シテ其ハ教化シテし佛縁ブツエンを引余シテセム。あ  
くや、さきれや世子アラフタはうつし、くも重シモ密シモの知識シラフを遺傳シテお  
こなすを極シテめでたす。ひがみ勿シテれ、今世カクセイの如シテ、摺シテる爲シテ。

思ひの事の音頭の本小邪鬼鬼神蟲兒の名も御訓  
と云ふ所れを年忌御子といふやうきく訓へますかの鬼子神  
子へ音を拂ひてゐる所が「御辺」

擁文漫草 三

權守屋文書  
井野石川用山縣侯の清臣  
名鑑石をうみて、數百石の奇石  
をあつたりて、あるる名をわざひの躰鞠庵作り、と云ひやびよにやく  
をあらそひて、ゆゑに、盆庭の風浪をほこらし、名を、と號す。かうぢえ  
がうえ、日向より來す。

かと重きをうらめ風すゆゑとせとせりががまことか月の夜  
加藤大助藤原甘樹を號とす靜舍とす賀茂真淵翁門人を名と  
名と字と號としよきのとくとみくも静舍集一卷あてて著  
物説古今集などに注釋にてあるとよきふとよきわざと  
きくあれどもあらわゆるせせせされどもとくとくとくとく  
あらへあらへあらへあらへあらへあらへあらへあらへ  
其子正附が重少佐ひとと葛鎧に向ぬり鯉を乞ふ事あり  
てしてすとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

かくの如きをとけてかうと舞の多」とすむとひどく  
寶永七年七月、浪華の佐々木ひきをひきの岐畠日記と云  
ふる所。上野國甘利川をよみて  
雄永の山を一ある日、あひとてゆけりまし。  
あは事とあへて、その席衣とひきの山にと稱の古風。

鹽尾の奉とてえと、陸馬<sup>アラシマ</sup>うけりの潔<sup>ハヤシ</sup>がまうじゆにあつたよ  
りんかくと、うじひ、甲斐と信濃<sup>シムス</sup>の兵士とも、軍をうけ  
て、うあむす、うき、墳<sup>ツバメ</sup>と色<sup>シロ</sup>の原<sup>ハラ</sup>うとさ。

のをかうし、新章もおもひだす。原  
信濃より美源へつる。  
主の行處の山渓えどくのむらのやう  
は草むらとよむれり。

四方を走る車の音がうるさく、車の音を走る車の音  
がうるさいと、車の音がうるさいと、車の音がうるさいと、

身の内に於ては、此の如きの事は、必ず其の主の心を覺へしむる。故に、  
身の内に於ては、此の如きの事は、必ず其の主の心を覺へしむる。故に、

卷之三

○參河國加義郡七庄口

兵主社

近江國舞洲郡

兵主社

祭神

大己貴命

擁書漫筆一卷二つほどの考傳曾丹集もつけてアリ  
垣根の脇代よそ人を船の上をとどめしやで黒木小上毛を立  
てかほくあうすと同集小源順が郡を戴ふるかづけくらむ  
とせむから難は江の芦向ひとて遊ぶ船の子、え  
詞書を考ふてほんりを相作のゆゑに船とし合せ、唐上  
此相作手といふと和名抄織機具部を武藏相模に寄  
織足も絵墨ともあらし絵筆ともあるとあると加賀之  
絵筆ともさを織てしもと山絵くらみと俊頼口傳上毛  
辛則小ひき組布と云ふれもふたてあふをのねりとあり  
ける事とす。袖中砂八れ巻けすほも布地無則直參  
承ふ。司馬法が三原とあわぬほか。おのものぬけ程  
乃をあまよあじたはうり書言字考服食部古無垢と

載小袖も和名抄羽族體部カモツブ大選海賊云鳥襍  
布久介カモウカイと有るありて、布久介の妻カモウカイの名をほこしてあがめ

擁書漫筆カモウシキ云ふをふやしはもまの種の條より曾丹集カモウシキ山號は  
アヤシキウチシキの種の條の下にて云々、散本集二の毛夏郡耳  
やのすの坂カモウシキ山號の山號の毛夏郡耳カモウシキ山號の毛夏郡耳カモウシキ  
えく)散本集の筋毛山號の山號の毛夏郡耳カモウシキ山號の毛夏郡耳カモウシキは、  
希婦の細布カモウシキとより手にひりてやうらん、希婦の里カモウシキ山  
山カモウシキ毛夏郡耳カモウシキ毛夏郡耳カモウシキ白布のすじに縫之俊賴口傳土裏毛  
鳥毛毛夏郡耳カモウシキ毛夏郡耳カモウシキ、希婦は陸奥國の名跡カモウシキを接毛  
出せり、奥羽觀遊圖志十二の卷、郡縣不詳の都カモウシキ狹布裏カモウシキ  
哥松古傳云郡名也而當國無此郡名如何衣笠内府歌郡カモウシキ  
或曰是布名云云或說曰今地村居在南郡境內舊跡遺聞  
二卷小希婦、鹿角郡古河村と云ふをけお印カモウシキとす、今ヨリ古の御カモウシキ

童蒙抄六卷、八雲御抄三の半卷、奥義抄中の下袖中抄大卷、  
色葉和難集七卷、色葉集中の意、鶴林良材集下卷、和歌  
要略抄丑之卷、雜和集下卷、漢盟草十八の卷、昇算集九の卷、後拾遺  
集卷一、新拾遺卷二古今六帖茅五帖、牙六帖、新拾六帖、第二帖、  
堀川百首毫の部、夫木抄雜十五陸奥名所考、類字名所集  
計部、名所便覽計部、勅撰名所和歌抄出郡部、松葉計部、  
武藏野考卷、東國名勝志一の卷、東國旅行談二の卷、事遊雜記  
才の卷、一日玉絳の卷、移枕名考せの卷、故稿玉叢抜書陸奥國  
の部、文明三年序假名名寄下卷郡部、文章書鏡九の卷、類聚三  
代格八の卷、隣女始吉一の卷、江戸本傳抄琴の計の部、  
子守謡のうりふを、さくさんえり

石虎  
勝

水戸市川雄勝郡守

玉賀都萬二卷第キ云水聲原川  
川乃多事而此一川もすまし水の聲川とすましゆる砂の下代あ  
はれやうもくべふらもき川をもすて万葉歌小真者を今とある  
御原川下りこれ瘦月石日して家小土示こちくに中よまきをみ  
其向あゆよとせらうこゑを於ゆ先又「ゆき」ゆきその處に「じ  
水聲原川有てもぬゆくひ水を古今集五言「山」水「山」水  
そりそろのせ川乃是原川あしまれと、走五京「遠」近「移」移「方」  
海あれをせりあすゆるてそのものなし、又「水」水「有」て「ゆく」  
ゆく「ゆく」ゆくのひす水聲方をまくと四つ之てどく皆もまくし又  
萬葉十ニ又「水」水「有」て「ゆく」ゆくのひす水聲原川下りて、御代一御代一御代一  
水聲大川をもすまし、まくしゆる沙をもくし、御代有すがどと也。

出の所をまよひ瀬川と心得て船をかがまし、山崎へ下りたる。真の瀬川とも立田川ともいひこと、上件小字もくそくせ川ともいふ。古多事のとひあらはれ名しき、類聚國史、延慶弘治元天皇水成野を遊獵りて、あらへるゝと、本成村をゆきて、瀬川今ある瀬川とゆき地名より、瀬川の名が付く事うなよ。瀬川水成と呼ぶ。又トシ、方舟小火江川と呼む。かくして、成河といひせども、みるにこれと云ふ地名も、又川と云ふもの。古よりある一里もみだせとも通つて、と見えある。瀬川と呼む地の國の神通川も、ゆづて通れば、宍道川とひづく津軒の千歳川も砂と滑て、うすき石あり。もの外、お前の大河とみるに、瀬川を多く見る。その瀬川をさして、

### 仙北郡 金澤

人見日記云、智足院様六郷より庵をまれば土の接  
あざと折り仙北を駿櫻又をめぐらす。此岸金の山兼  
清幸、以五具ともを守護し舟を下し佐井長方  
特登引上す。金澤の古城、公龜五キリ。一揆せん郷の御城  
押掛と云て、義方をりと金澤の人数を引締り  
せんとゆけり。下川形部一个で一揆のみれよめ  
十九人を討ちとられば、主めく達の舎を連りりて  
坐車、形部をゆゆめあひ方にとありし世のあすり終ひし  
を隣も、一揆をゆ館て焼くとせむと。中川因幡の矢張  
引くとく射倒し、の渠渠と射落して、舟が立つてま  
らりくよ進まぬ。と云ふ。

同書云北金澤の下知を世慶某家大山米安よりの手  
於之後小徳下部少佐より年貢調進、外目と  
非至り也。争論起り、土民某賤吉子をめぐらす。  
某年貢取充し、課役をせずもあらずしも並  
て不セ考へど、追々駆立大山、後之に蘇せしと、本  
心利き矣。又小友<sup>治部</sup>鮎川村の郷士多源の彼、村の  
主和達し事鎮りし兎角解死人をあさうと、公  
西<sup>北</sup>尾上尾等、口々に公のまゝに、名曲と鞠開し  
されば少しおこづかひありとぞと極利<sup>ト</sup>可せばは  
予金澤の大山善<sup>サ</sup>、賜<sup>シ</sup>て夕地<sup>ト</sup>有<sup>ス</sup>む川村  
曾無<sup>シ</sup>と名<sup>シ</sup>と世銀の人<sup>ト</sup>ぞり、是、川村形部左衛門<sup>ト</sup>  
祖<sup>シ</sup>、卷七浦<sup>ト</sup>、二男<sup>シ</sup>と相續<sup>ス</sup>。

同書云北金澤の下知を世慶某家大山米安よりの手  
隠<sup>ス</sup>其子孫と五百石を戸<sup>ト</sup>御家の子乞<sup>リ</sup>、妻<sup>シ</sup>家柄<sup>ト</sup>  
移<sup>ス</sup>、背<sup>キ</sup>元旦の式<sup>ト</sup>詔<sup>シ</sup>格<sup>シ</sup>、墨<sup>シ</sup>原<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>、法<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>善<sup>ニ</sup>  
む<sup>シ</sup>、寺<sup>ト</sup>家<sup>ト</sup>嘩<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>れ<sup>バ</sup>、且<sup>シ</sup>因<sup>シ</sup>縁<sup>シ</sup>其一年甚<sup>ニ</sup>雨<sup>ニ</sup>  
と詔<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>る<sup>カ</sup>、又<sup>シ</sup>寺<sup>ト</sup>興<sup>シ</sup>登<sup>シ</sup>祀<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>て、本當<sup>シ</sup>除<sup>シ</sup>高<sup>シ</sup>  
江戸<sup>出<sup>ス</sup></sup>、ちよ<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>て、向<sup>シ</sup>旗<sup>ト</sup>モ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>。

同書云天英君<sup>ト</sup>宮寺<sup>ト</sup>川<sup>ト</sup>のやうに效<sup>シ</sup>方<sup>ト</sup>も<sup>シ</sup>合<sup>シ</sup>  
そ<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、船<sup>ト</sup>鉢<sup>ト</sup>舟<sup>ト</sup>引<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、中<sup>ト</sup>怪<sup>シ</sup>歎<sup>シ</sup>  
そ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、筒<sup>ト</sup>の<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、君<sup>ト</sup>旗<sup>ト</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>  
引<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>経<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、引<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>奮<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>君<sup>ト</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、  
み<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>車<sup>ト</sup>往<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、腰<sup>ト</sup>引<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>出<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、よ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>方<sup>ト</sup>  
あ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>傳<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、神<sup>ト</sup>お<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>一<sup>ト</sup>く<sup>シ</sup>を  
足<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>下<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、足<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>上<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>、神<sup>ト</sup>お<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>一<sup>ト</sup>く<sup>シ</sup>を

洪福寺淵の夜半を碑出人をも角館の北家へ  
賣りし不<sup>レ</sup>年経て以<sup>テ</sup>高<sup>ク</sup>事とやれ。室保七年十一  
月二日と右も同と北家下り御上あつりとす  
通傳の記録<sup>レ</sup>古年もち村の川<sup>レ</sup>世も是と同<sup>レ</sup>の事と  
上傳して此處<sup>レ</sup>下され<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>也。世も是と同<sup>レ</sup>の事と  
や便<sup>レ</sup>いが<sup>レ</sup>怪<sup>レ</sup>の極<sup>レ</sup>に痕<sup>レ</sup>簡單<sup>レ</sup>と有<sup>レ</sup>也。と云ふと  
之<sup>レ</sup>の怪<sup>レ</sup>の事<sup>レ</sup>と云ふ。其<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>は世間<sup>レ</sup>も事<sup>レ</sup>  
れやうと仙<sup>レ</sup>あは<sup>レ</sup>仙北郡<sup>レ</sup>麻村の音<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>都<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>る  
事<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>切<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>あるやう<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ

河北山本　目長田　目名四

夜郷 岩子村

岩子<sup>レ</sup>と云ふ事<sup>レ</sup>一名<sup>レ</sup>擁<sup>レ</sup>漫<sup>レ</sup>葦<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>共<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>  
多<sup>レ</sup>草<sup>レ</sup>亂<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>府中<sup>レ</sup>玉<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>岩<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
ありと<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>鉛<sup>レ</sup>洪<sup>レ</sup>鐘<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>ひ

竹本郡<sup>レ</sup>岩子<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>地<sup>レ</sup>。古<sup>レ</sup>碑<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>。

**河北半**

**飛根**

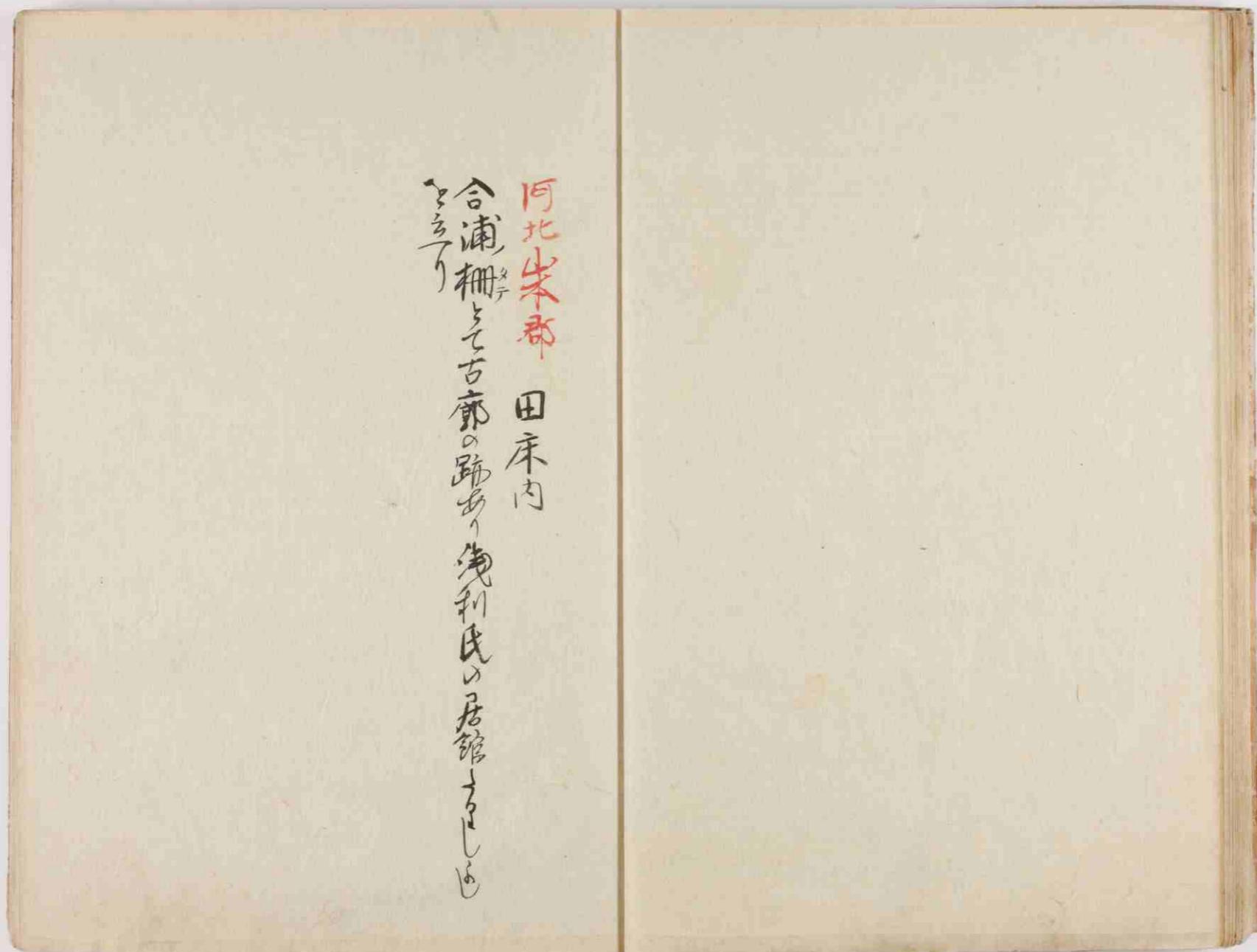
古名龜峯山中古富根山<sup>シヤク</sup>、慶安十一年丁未秋  
涉江内膳某よりて古町下村大林小林林平<sup>ハラヒラヒラヒラ</sup>  
あと多く驛馬<sup>エキマ</sup>定<sup>セイ</sup>す  
此の北川向<sup>むか</sup>す、孤森<sup>ハリモリ</sup>の近<sup>ちか</sup>く、龍<sup>ル</sup>ノ富<sup>トモ</sup>と云<sup>ハシメ</sup>、<sup>ムツ</sup>根<sup>ル</sup>  
そを同名尾村智積院尊諱<sup>スンヘイ</sup>女移村平光延子常<sup>ル</sup>  
室<sup>ウツ</sup>也<sup>シ</sup>、<sup>ウツ</sup>き<sup>シ</sup>有<sup>リ</sup>、余<sup>うそ</sup>と、老<sup>シ</sup>て、心經五百卷<sup>ハジ</sup>  
龍<sup>ル</sup>箇<sup>カ</sup>岬<sup>ナシ</sup>の巖<sup>イハ</sup>を掘<sup>ハサフ</sup>て、納<sup>メ</sup>め、志<sup>シ</sup>作<sup>ハシメ</sup>真言五方龕<sup>ゴノケン</sup>  
之<sup>ヲ</sup>他<sup>ハ</sup>、<sup>ハ</sup>活<sup>ハシメ</sup>、秋林妙惠<sup>ミョウエイ</sup>と云<sup>ハシメ</sup>

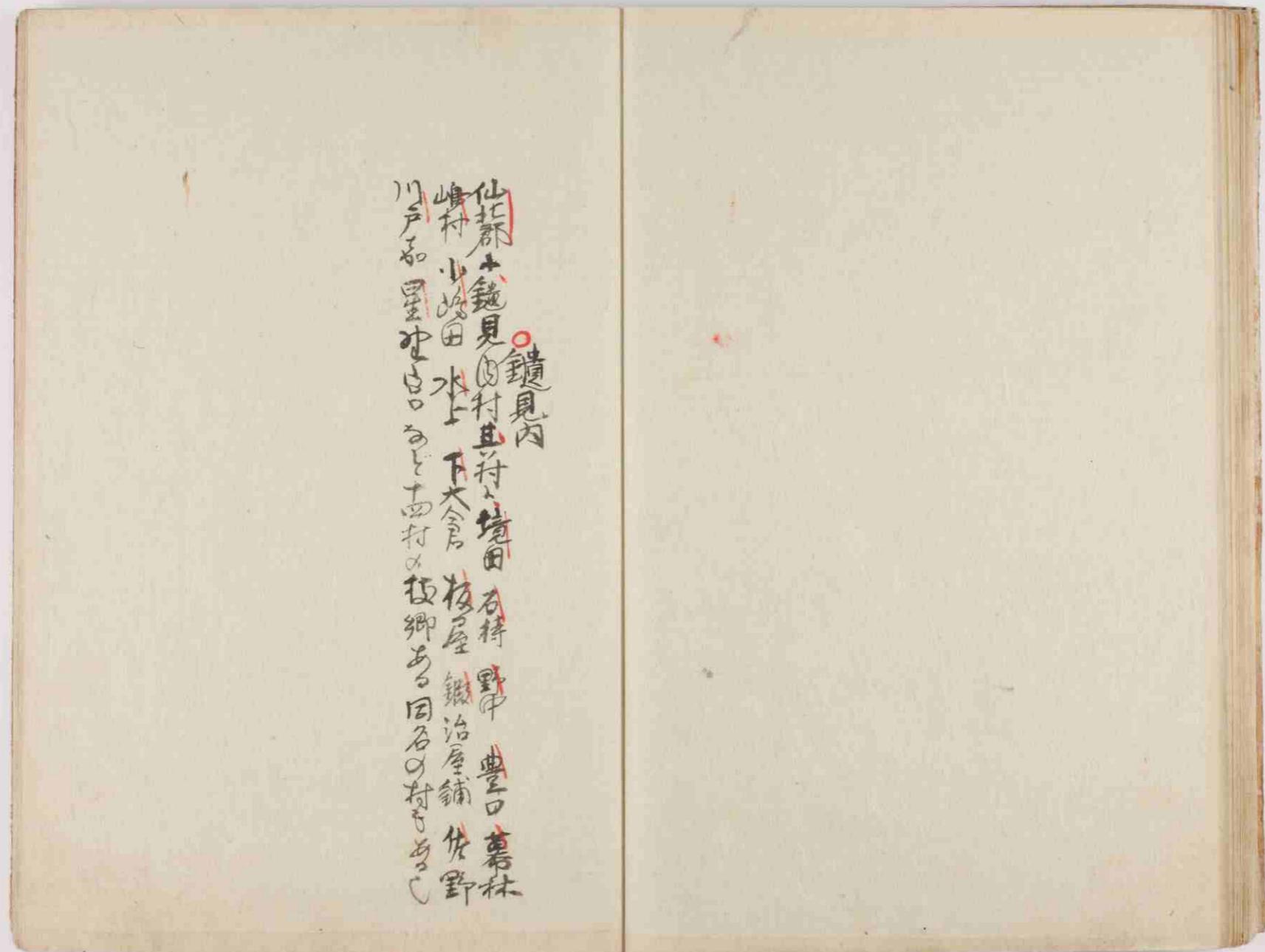
**枝村**

**孤森**

寛永廿年空手<sup>ハラハラ</sup>トト人住<sup>スル</sup>

明立新田<sup>ヒツダ</sup>、美應元年<sup>ミヨウ</sup>空<sup>ハラハラ</sup>トト人住<sup>スル</sup>





○五反坂

今之舊坂下ある戸村氏の草手のああすと五反坂と云立  
醫田五反坂をと名うれ名實承永二年乙未七月吉日  
船照公より上ほの傳手を下向志九月廿一日山城廻福  
竹子もと高ととく山中なる五段のああすと略すとひき  
瓦の事古記よとて

人見日記云、武州岩槻城主太田三樂道灌二男小二のあつり、  
兄源五郎事と源太<sup>事</sup>、源京美儀<sup>事</sup>、源太<sup>事</sup>當腹<sup>事</sup>もあし  
休<sup>事</sup>、源太<sup>事</sup>常<sup>事</sup>志<sup>事</sup>、是<sup>事</sup>も又<sup>事</sup>樂<sup>事</sup>も序<sup>事</sup>も上<sup>事</sup>  
家<sup>事</sup>も、源太<sup>事</sup>不<sup>事</sup>し、源京源太<sup>事</sup>石<sup>事</sup>也<sup>事</sup>、後<sup>事</sup>、美儀<sup>事</sup>も<sup>事</sup>し  
我君<sup>事</sup>の部下<sup>事</sup>と<sup>事</sup>し、後京美院景<sup>事</sup>園<sup>事</sup>と<sup>事</sup>、度<sup>事</sup>久保<sup>事</sup>

久松田の事記

○竹堂の鳴鶴

世小林者あぬき龍とくづまのよひやすり。とく  
体筆元仁云の書画し食日記不すほそう画工便賢と  
見て第十四云、佐竹吉京太夫源義仁<sup>号竹</sup>實上杉大金  
息海印弟武功馳平世應仁三年十一月廿六日卒年六  
十八歳也。竹堂君、應永七庚辰正月廿二日、高仁元丁  
亥正月廿四日指館也。

○三部行

ひと三部行しをゆの高原家子使一部とへるに二部  
とへる一部在をあらわすとゆのよし  
一部せりゆと通けよするもれ布街の指揮<sup>鎧</sup>高<sup>代</sup>  
統の一セリウム在をゆの祖

○孝子傳

○國人風占記  
盤石君<sub>（源氏）</sub>代門川玄智開眼子<sub>（源氏）</sub>  
元日近侍の御席通すをあひて、浪人<sub>（源氏）</sub>て掛軸<sub>（源氏）</sub>  
市中本宿うり居すれども、宇治の沿岸<sub>（源氏）</sub>からやまと  
此頃近所町衆<sub>（源氏）</sub>そ、土蔵を作りしが、其壁と塗りし手の筆  
數人まことに、湯より抜きと其妙、玄智へりけど、ちこ  
とも居小坊<sub>（源氏）</sub>の邪魔<sub>（源氏）</sub>とも事じて、ぢやうとめに一  
けれど、醉興<sub>（源氏）</sub>かのよされば、信名<sub>（源氏）</sub>一あくは酒を喝<sub>（源氏）</sub>  
上り、衣帶<sub>（源氏）</sub>と着<sub>（源氏）</sub>せり。みどりも松も雪も夢<sub>（源氏）</sub>  
ゆきうすれ程の林<sub>（源氏）</sub>と、雪<sub>（源氏）</sub>と柳<sub>（源氏）</sub>と、みけ<sub>（源氏）</sub>と、  
お智一人をすくう扱つて、とくとう大よりうとねまかと  
立候ひて、覺悟のありぬ、身半のを立つて、もとぞく  
手一ふづれも聲に違ひ、脚も身もうすく、身の序<sub>（源氏）</sub>

鎌本宗因ひうれむ所り金を手の手練と見口玉者を出  
とが、己もかよひたるのをすやす式禮し、互子  
石井の先へうかく人となり、そのとまゝ柔術の  
源流をへば、根田市郎景年不等の山能は源南の御  
根田市郎景年智  
等と申し、藩内其の主の縣へく頃々ニ居  
て、幽玄抱世錄トモアリシレ、至贈、庭苑假山水  
の法を教へ、後、更に一の園圃を築く清江氏を  
考擇、全良寺の庵を造りし是ハ三峰の園を向ひ  
太鼓橋を廻らど、天守閣、土蔵、書庫と之を以て、  
今庵造りの商人、三三脚の其頃より、足と筆葉  
等あつてあり、一筋も、其三本の景を圖すらせ  
等の御家は絶えず、化粧を充て、名前

お花の脚からあらはせぬまゝもむかへ詠ひあり圖にし  
ゆも有とや此處幽深の林をすそに是れ凡俗の邊に  
滄洲翁など折り詠ひあらひ觀龍塲指月亭の跡す  
より、山中夜傾盆雨、拿得廬山瀑布寫よりて瀑布  
藤の名を高げたるふ玄智耶の事うる處也氣色甚矣  
世間と云金の手をもひず立退を即ち折り止心流  
柔術の奥旨とも十郎柔術小残さん乍と傳へ凡草故世間  
無能の石參なりとて直指を放りより其傳承く根田  
家小のう今も且つ奥旨と門人よ保有する直指を一袖  
寫りて御とせよ術をすくんだけりと宗因も印加と免  
名をとる事もせず、のうべに十郎柔術小傳へ放其筆すと幸  
せん若根田より傳てゆることゆく一封を多く審因しけり

其と根田が爲す根田御見れば、宗因の性情正ひびき  
奥旨の許せば、めぐらとあひとも、不附駿と世間と立退く  
玄智世國と立退く之の靈泉基を、日向山城郡と  
すとて、事所と云ふて、二百石の重をもととすと、  
後仙基不<sup>可</sup>能相せしとす。一人の  
修驗も心にて、全あらず、まろけとて、御へよどみやく  
王彼<sup>サ</sup>と、又の大才の、老をりしものあり。太キ  
椎棒<sup>カ</sup>と、玄智と徹慶<sup>ハ</sup>かれとぞ御せしとす。  
此時修驗も即死せしと、彼の後生<sup>ハ</sup>れゆ、玄智  
修<sup>ハ</sup>えんせしと見えし、世事土肥存計<sup>ハ</sup>れぞり帝  
武藝小傳小土屋將監、神尾伊豆守<sup>ハ</sup>、將監おと奥地  
下を終<sup>ハ</sup>て初<sup>ハ</sup>、佐久の奥臣唐都七郎左衛門<sup>ハ</sup>、其傳<sup>ハ</sup>甚矣  
特極他國<sup>ハ</sup>事を私寓する居て以て、源氏某川又算<sup>ハ</sup>  
將監小左祖一<sup>ハ</sup>大子門下となり、時<sup>ハ</sup>西<sup>ハ</sup>、尼<sup>ハ</sup>高畠

事多々不足を以てじま遠なり高厚を而  
在す。柳生の極秘の手は、夜直脂の毫々護り川又  
微徹も其奥をほほへ一毫も譲らず、將兵立退く  
御事。川又は、幕大正保り、代々兩人甲ひて日後殿練也。  
彼が心も、依怙をひびて保、奇怪の所至もあれ追うて二家  
を離れ、矢立峰より出づん時、将兵遙に跡を追うるにて、  
馬廻をまき、追事しきものとて川又をとめ、追うて、  
ちをかけも、あひて、石かづ一巻の事かえし、甚深厚  
の志。牛尾及近源氏の奥秘是くち。万を織り合ひ  
しとぞせす。小川又組真義の方こそ、も執事に奉其  
侍候しりれば、うなぎをとり、低頭平身角立序拝

仰すじ方で、まかくと双方一とて別れ氣込と想  
の三派よりれども、怪監も、津幹の方へり。久甚處を  
知るれども、後母の竹笛、事、死せり。今、金四寺の  
宇山伏保と笠置並べて向ふを、怪監基もあり矣。  
太冬保、正主が死り、年と正月の三日、小倉花と通す。  
日、内侍今村吉葉不僧守人、とてに戸入り事あり。され  
事の抱あらしれ。是と津幹の方へ心す。古の事一と  
極津をひき、仁史、因後、足馬をして、湊倉前を追事  
を扇一とて、推事うして、承くせ錦の人とある。

**華人**五重子ゆりの醍醐源を我、瀧源麻山房へ解説  
府下すあり。今、西十國廣、峰より寄りけり。属人ども、  
鬻術を傳ひて、華國某元仙ゆきと云ひけり。

今薬帖の裏シミより五毛子包カモと生の筆画二万  
字に七十枚と又世人のもの不利アリがれが包カモしよ  
えせりて手邊事都ハタケのめりもくめて医堂薬院の諸  
病を療セラフす。石黒近遊は其の世エラ多々考  
大方ヒロシマの所事部ハシブの佐サトウ其田の大東院と  
魯隱君子五毛子暮クモクのこすりしはそり  
りも水戸の舜水スンシ朱ヌイ瑞ツキと同ドヒミ即シテ  
人ヒトのヒト。

國家の事ハシブ造酒定信カツシキ七合川降也シナガタ石黒同塲カモと云  
て以ハシて高名タカニ定信カツシキ出羽郡ハタケ郡の國府庫カモと稱ハシメ萬の國  
移ハシメ也ハシメ筆跡ハシヅケとして希ヒく正マサニ山光水マツコ櫻シラク戸ト多々  
在ハシメ一高タカシ人の家ハシメと残リる。同塲カモと画ハシメ牡丹ツバキ拾山ハシヤマと書  
て置ハシメ壁カモとある。

○草名四代記ハシメ一冊ハシメ上杉景勝草ハシメ神指ハシメ

卷ハシメ合ハシメ百六代ハシメ正款所長ハシメ天正六年六月十七ハシメ一  
奥州會澤の領主ハシメ佐原十郎左衛門尉義連ハシメ。土蔵  
主案ハシメ章名修理太夫盛氏ハシメ行年二十歳ハシメ而ハシメ逝ハシメり。主  
元ハシメ、號ハシメ之盛氏ハシメ先祖ハシメ精ハシメらハシメ恒ハシメ武ハシメ向ハシメの廣ハシメ  
上總介高望ハシメ六代ハシメ三國大竹義明ハシメの七男ハシメ佐原義連ハシメ  
始ハシメ、會澤と領ハシメせしとハシメ。五代末ハシメ盛貞ハシメを鎌倉  
小在ハシメ。其後直盛ハシメの時ハシメ後圓融院康慶元年己未ハシメ  
鎌倉ハシメ。會澤へ下向ハシメ。布ハシメ幕ハシメ内ハシメ三年、十鎧ハシメ後ハシメ。  
二年又ハシメ後ハシメ。後蟲尾ハシメ至德元年甲子、小田山桂樹ハシメ  
九代ハシメ。有ハシメ。修理太夫盛氏ハシメの時ハシメ、改名蟲國ハシメ不  
顯ハシメ。其後虫尾ハシメ改名ハシメされば水保天王ハシメ。

其の中不穢。手行で遠く已往、艦船と向ひて  
元弘建武ノ初模入を太東方の續事。猿煙籠四面  
扁して、脇廻えの、ろ唐子臣公征夷將軍。  
傷り絶ゆ。後、我幹て、備より少佐代お移し。  
ヨリ明徳ノ氏清が乱逆吉田滿祐、巨國をも  
よそへとす。此小權威を失し、多尔永禄二三好、叛逆。  
因て、光源院成輝弑れ。五歳、五歳、武風會  
置く滿之ひき。不思議。織田信長公の武力移行。之し、  
盛民年母の頃。天文永禄より天正、妙なる。而更に、君  
有して、御まつる如し。然ト奥州遠く瀉て。上古モ鎧穿  
府焉置キ。或、摺穿佳傷仗と曰ひ。圖非常。少佐也。  
うふ。秀延文元。ふと後、支敵院す。斯般大崎伊豫宗

家兼と、春興野西園の探題。補せられ大崎郡へ至れ。折被を  
二月修理。太夫兼賴と出外の摺穿使と補へ。同三年八月、  
最上山形へ下され。せども、年母二百石減る事、やう。探題  
風も若を摺穿使と名す。世の多くは様す。勢中世ごろ、  
王室始と傾しさ哉歟。やう。摺穿使と再びる。下穿  
護園司の例も、久く絶ぬ。永享十年、鎌倉又持民敗亡。後子恩  
成氏と摺錫倉の管領と仰て、開東の越半と稱號の形を取  
立。も程々、而上移す。棕のれ下綴の國。古河へ後、元日より  
行形をひらき。多方の多く呼半之をひき。無鹽代。黒代。終日  
不褶頬じて他道。長沼と押領せらる。白河の毛親と幕  
下を屬して。縁眼と。御事。事後。那須の途生を大形。世丁等  
寄也。相用し。鳥帽子を手附りて。京亮。織田丹吉。吉蕃丸。

清頭須賀川、二階寺主延は宇成義其外郡山、栗ノ宇平、阿子  
峰迄に少名城も第一席毛の指揮をひどく小陸、ス秋慶の七尾  
謙信の領とも一城を勧立多々岩城佐井守とて厚くお  
し合残能及、取代化金曾集小向て絶矢ヲ財源とする所  
をレ被、數々致人の攻め置かねば九条氏康直守の直  
信云も易々信致せられて云

### 盛隆被政御代田城之文

<sup>元</sup>十九年田村吉蕃允清頭と盛隆年若々越の手よ頭と云  
事と幾如ナシ、盛氏在世頃の権算を替て盛隆の老母モ  
御座了。須賀川の領と侵一橋逆の奉勤多ナシ、佐井臺  
ナハトモ盛隆之力を合せて田村が逆乱と鎮じてしき極て自ラ  
奮進(事)盛隆と同清頭が御代田城へ押あセ教日を痛く攻

### 新發田請属盛隆事

<sup>天正</sup>二十年春始め信濃國住木曾義政が謀叛を便り起田四裏勝  
賴を追伐あれ等ニ織田信長卿、安相林、息、信忠卿十作万の軍  
勢を二千余石大半擣シ兩方より定め、そのうち、被後五万守  
護長尾吉平次景勝も、その御幕下に屬せられ、此次より追伐  
シテさう内に風支子を因て景勝甲斐信原、西園の大勢  
を率、要害と堅固にて用ひ油あらを打きられ、新田四因幡  
守同源太守も、催促の勢の内々りて強チ本郷をもどり、  
公儀と茂如一結句お近ち故金上遠江守とあともじ金澤守  
属あり乞は、併盛隆景勝と黒井、金澤國の好ミ寧々且不甚  
金上遠江守も因て景勝の恩顧疎かシバ向後ひ豆と並び、  
新波田等の所望の二目と不同く其後景勝也と似てやうかと、

唐ノ文と不倫ちえと深く感へる

同上之卷。朝後新舊後承之事

辛巳

上杉景勝即徒新農田因幡守五十公念す城下居同源太初  
菴田の城を居す至る景勝小舟を會津に屬す者其者於  
北園を隠れ所へ鬼新舊の名とされす國の者も其因幡  
白鷹の馬の其長を寺へ分主あつてと死まし尾髪を毛  
葛を拂ひ常あるをも第りとられ、新舊の因幡が毛色  
つを毛少はしける彼寺二人のものと景勝の代をもす  
君臣の禮を起り何するも雅高すはばはて釣へ金持に属し  
荒井の景勝改本腹立せむ推考を討て捨てしる不日小春向  
かひて一書と多くこれ以て二人の者のかどり急ぎに紙よりと金運  
合進へすうちもが彼寺が彼(後述の事)とをまじと數合三百

錦騎の有到す名を三里門を出て、舟渠西の佐瀬原兵庫も  
催促を執り内切りけり。舟を其の出立様へと取てしりし  
先鐘一端とくらす。白き縛を修多羅と書る。惟子と看て、故  
脅突の指模。左岸此の解は龍首と云。旗首。田の前立物。世本  
高志本佛の御子とすりと。金滿を濃あり。正甲と云て脇  
指を繋とねまよ。朱木漆す。十尺と六銀を逆鱗口て張る也  
柄。締り。柄首と赤銅を張り。佳解形を影物す。黃金ひ  
己が改名。象眼。又摺ぐと。十丈の丸を括る。甚手の合  
勝れ。傍りと佛て争ひ。其形離れて見ゆる。其跡を  
口より附す。今度原井出で。出主は御者。義湯。寺中事。形勢を  
彼種とせざればと傳ふ。御者義湯。寺中事。形勢を  
御者。寺中事。御者。義湯。寺中事。形勢を

は井守とす者、そく体をすゝむ。朝のものもさうもせぬ  
景勝原兵をもる者きのゆ似合て思切る半立をうなびて大勢を之が  
多るもれど、諸軍勢を抜て坐し、目よきものに蒙來  
正ねば功名を競ひ、諸軍勢の間じとあられ、又急難度で大勢各  
勢れども、嘗て、討犯せんとする志を失中とぞす。勝毛等  
者の備えと自鷹頭後ろみて、たゞそぞと見知れしとの  
用心よ氣て、物れども、将軍事を知りのゝ見えず、従々如く、  
乍ら勝毛をも、傍き士今一人方を、何處ひあらむ。徒に  
往くのり、体を、忍んで去程、會津より、後諸の勢を移す  
馳着て、後は景勝も内へ、既定へて、大勢て引率し  
東向せとす。小村義重は、後諸の會津移すが速かに、景勝も

陣へ駆合せ、敵を軍へけり。併の佐原原兵が、出立する  
事や、此も近を、味方の舞の正をよ、かけ已ぐ、鉄炮  
足軽より、おのども、敵を、キセキと軍の始として、衝風急  
雨の如く、景勝の本陣へ討かれ、景勝の備て時々、是く足  
手の斯の相節如何、思せじ新釜田馬、より、或ひ下り甲と脱  
走して、景勝の陣へ向ひ進じ、味方を制へて、云孫、其事景勝  
恨を含み、一旦即ち企てて、八年鉄炮を、復籍の援兵、無事、  
是の今面の力と傷りて、是事は、軍致し、一應、遺恨を  
寂じ候じ、是を、會津勢とお連れて、引退しければ、景勝も虎  
の羅を遁れ、相月下へりとぞり。

御指

軍

同云、卷上、形景勝築、御指と取、モトノイシ云

慶文五年、庚子二月十日、景勝、金直江山城、年兼續

同日始て神移の波本丸を築く。果諸古木の保方で甲賊と不用。五月十日籍放會津仙道伊能在内未定役夫十三万人。織田六人。神移の波と築く。む縦奉の直江守成守小手より小國但馬。甘數備後山内有清九種方馬割奉り。嶋尾郡在兵部主事の勝願寺仙翁寺。寺之名六角朔日神移の波大体之至其度。本丸東西面南北百七十方石をうちみ塙とせめり。高さ廿三間。二月起造西二面六十万石。高九千石。里根九丈。高半尺間。二月太曾根とて。而後も大工跡を復す。の先日中日より今日本寺まで、二年大体を終じ也。

○櫛塙の重助忠義

江戸浅草の小堀理直の子の事。彦平忠義の事也。孝子重兵院。鶴原勝那。櫛塙村之殿夫。之名重助。重兵衛及妻子事甚父母。被渴甚其力。遂近以松葉茎。孝焉。於五年七月入母胎。患中風。至疾。嘗無能。半身不擇。其病云々。今歲邑寧原木医佐助。具狀其行實。而達于公庭。於是賜青蚨。多縁以旌其孝。亦使之以益。遂其志矣。至の事。江東仰仰思廟曰。孝者也。者人。俗之大者而至。寛延二祀。歲十月十二日。深思廟謹識。

景元

○寛上令教記。義定在内政之子也。子一子去。福井庄内政之子也。三田。水口。大藏。猪四。甲斐。守。大曾根。守。豊前守。難波。越前守。野邊。源氏守。土岐守。吉

内舗島前守奉行三里見原古馬加藤越後守都合  
其勢力平野人山形と布志と、月山の嶽と越後川山巣中  
瀬と酒田の坂と押寄する甚歎の坂至川村兵藏志の修理  
之助幡曳を多々討て出最上と前守當て陣原とせ峰高先陣川  
城不打勝て唐之金舟音響之し鉢弓とて瀬置れ居と  
一子舟と船方と御船湯とを機く後一舟と並みて居る  
十斗川上より舟四五艘多くて今度の生津と下治崎と  
高須名舟と向岸近く放じて舟と舟引手ひと舟引手  
引ひと舟引手ひ太刀工向手と一子舟と向手都と待詔引  
石井川村兵藏志田修理之助前後とかけ回り埋て上木伏  
ちるある處と銅火鉢地と入賀と、舟引ひ先に此と通じて  
多くもととけは君進むとそえりと一家の戸井本丸あらう  
とつての前敵有て思つて氣と毛と行はれくる者と兵と  
大喜上て士卒とおもすと、おもすと走り向ひ戸井と付合

下組五百人多き時掛合戦將大藏太輔是とてと物主と居  
て先の舞とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと  
て知て馬と一船よ川とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
瀬と船ととととととととととととととととととととと  
数百人向の後とおととととととととととととととと  
捨難かと引連せば治方萬を勝て安之城をハ平を追上を面金  
討取兩大将實駒とおれ大不感稱し北勢小貢つてしと  
知るが諸兵何と接觸とてとてとてとてとてとてとてと  
天呼の夕天地と雨中と去と酒田の西野城中とせ興  
てとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと  
けの小軍奉行加藤原右衛門里見郷守先而くれと諸軍  
復出居すととととととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととととと

細橋ノホテラ塔下ニ替リテ早利ノ若者若狭ノ内ニ既レク城  
逆反軍ヲ引領シト負先人來烈主ノ御大貴ナヘ後外題  
裏裏園田ニ兩社該城ノ引入路ニ鐵之籠也多シ勝手塹  
星体ノ假傳解モニ萬シ地盤ノ失破れ攻ニキニ二將ト合  
謀滅シテ是のけし城ノ立て事ノ如シトお招き出の太将中  
可ミ喜ムトモ豈田大膳小泉讀山寺下ノ手井半左衛  
門上年三月を多くニ守リケル地上城ノ明テ侵し降參中  
争ニ落城ノ者助希也之を也トニ依ニ鑑定官(四方忠臣)モ  
諸將評議の末小吉村伊吉土守高降參ニ許シテ彼等も之  
不直ニ取リテ子我ニ味方ト對抗モ(アレハシテ原野子想  
考ニシテ)トシテ行ヒトニ是日未シテ云ニ降参の士  
會見シ即ち其役十兵一ヶトニ云々かく之不知してく大幹  
圓田ノ城ノ極シ而大将と號ヒテ諸軍の多くも山形ノ  
惟津城を其後義光近習者リテ(且)ノ圓田ノ城ノ大  
治了仕事ヲ成ス云々有下院在りトメ其名也鉢谷  
田川郡一万二千石と統計に附焉改名對馬守ニシテ

神皇正統紀

三夷の漢天子、倭と名付けて云ふことはひゞ世間へ初め波士  
ヨリテ、ゆう國の名にて云ひておもひせしと、我モヤレモト  
モレシ即、倭ト名付けて、漢天子樂眞地註の碑誌由來  
傳中一傳人アキラハトモアドヒテアリ前國のじよき  
ニテ了ス通。ナニカアリ美事代うとモリハ、御座也ト大倭王  
那唐堆ト居テアリ。ナニカアリ。推古天皇の所也トと傳矣。の隋朝より傳來りて書焉  
傳曰王也く聖德太子之がノ筆事と云々を返賜。アリ  
給。アリス東天皇を教白。西皇帝と有矣。也ト。倭と  
書焉。アリ。日本ト倭也ト。書是より六代  
傳あり。アリ。人を云々。アリ。  
才二代正哉。吾勝。アリ。天忍穗耳。子。高皇產靈。塞。ま  
女携。勝。子。以今。アリ。ト。御座。日堂。瓊杵。子。セ  
ウ。吉。勝。子。革原。アリ。ト。御座。日堂。瓊杵。子。セ

緒ノカニモトシテ天子ニ當リモトシ

三  
神

日泉般命彦彥天皇

神武

伊弉諾尊

大日靈尊

大世

日靈尊

日靈尊

日靈尊

日靈尊

日靈尊

日靈尊

○三  
神日泉般命彦彥天皇神武伊弉諾尊ニシテ大日靈尊ニシテ大和國櫛原

○四  
篠速日尊御未ニシテ麻志同見原ニシテ御御イナ御御ト長髓彦とシ神劍をもてけん云此劍と曲江布都の御と云都

○五  
大和國櫛原

○六  
縊靖天白玉神武子ニの内子母ニ藉辛鉢船事役色大傳邑城高國高國也

○七  
安寧天白玉縊靖子ニの内子母ニ辛鉢依船事代主の御てひもめこ

○八  
諭德天白玉安寧子ニの内子母ニ塩湯宮御御片御御御御片塩湯宮

○九  
神の孫也大傳の轡の御御御御片塩湯宮御御片塩湯宮

○十  
孝明天皇諭德子一の子也天豐津姫自當者耳年の御也

○十一  
大傳也大傳上也心の御也

○十二  
孝明天皇也大傳子二の子也母ニ世龍衣也尾張の連の上也也

○十三  
御御片塩湯宮御御片塩湯宮

○十四  
大傳也大傳の御御瑞難の御御也

○十五  
卷向也大傳の御御瑞難の御御也

○十六  
垂仁天皇也大傳の御御瑞難の御御也

○十七  
景行天皇也大傳の御御瑞難の御御也

○十八  
じもえ也大傳の御御瑞難の御御也

碓屋長

○小碓屋守と陸奥守高見國三守のくを贈奉を承り  
おひこて常陸守翁田松也守也又、越後守守也承も碓白振  
守也守也守也守也守也守也守也守也守也守也守也守也守也  
古市○十三成務天皇景行天子の山母ハ坂入娘皇後入皇子孫  
のゆこ近江守志賀守高宗振の宮守也承也  
○十四仲哀天皇日本尊守ニ景行天孫ニ子兩道大船  
富仁天皇之女也天皇之子一橋日の行宮守也承也守也  
ふさの守也承也守也承也守也承也承也承也承也承也承也

○信訓集元祿甲申三月十五日江戸中堂より禮歩り。上りて  
石井大輔守次くは草の塔も又ものとし。やがて  
豹脚の塔もとて移もる。米祖の化もととす。太田  
守也。蚊けりうるうるとして。野の花の香り。夜の月もあらわす。  
○戒名今亡者。必喫はむ奉たれど。佛縛を絶じ  
國も事もあらず。高き泉の接するにし。母の御事。長金彌  
神主と題せよ。日本守。祖先うち。姓名。數代を傳  
す。凡俗もとづて。紛りゆき。故王戒名と見え。年をもべ  
後。撰集。毎作。のじまゆす。通ひ。作をとす。かく  
とく。作り。うそ。うそ。勘事。青も。拾遺集。もんじ。うそ。  
うそ。うそ。仁。守。夫。白。守。所。い。うそ。漢書。更衣。守。師。古。源。不  
馬。休息。易。表。之。原。亦置。宮。人。ど。く。す。階。古。の。兼。存。ひじ

御可も、庄司の如き、無田社田嶋少家小久明親主、御可職是古事  
御教書あり。御司を大庄屋の類にして、御士が行たり、御主をみだ  
冠とて、嘆頭よりなり。やうじつとも又通ても、此のよりあれ若目  
あく、重宝窟、唐額半窟、遙窟云々、冠假り備中二在り

駄文機の事。佐名抄、櫻鷺齋尉より是と云ふをかう。又幕府便  
案陰比事。文割常任也。之れは寺僧の什物と之明律もてする。  
引ひきぬきも。眞陥。文割の事。續徒然帖よつてし  
日本望。若て。かく。方を承事。も。かく。新撰字義。芬。と。あ。く。も。  
妙在。幽郁。も。う。香居。の。う。或芬芳。或馥郁。も。う。

古事記傳十卷

行者近作本ハ志度理解此登多訓モ然ニテ  
舊執部モ最後トシルトモ平廣く登毎此登多訓モ有リ故後し  
行徒者モ之也  
下巻尤穂廟段小御伴人モもゆ書記、徒子モ從人モ、僕人  
少もゆ。皆トモじトテ訓モ加テ同兄弟は率て他邦しも加此賤  
さア小見役トモ争ひ所用ハ既て大功業モ功業モ主ひとども人共  
細事モもゆ。中シユクの云ナハ從事の如れハ勿ベ  
書記、歸類黨類同伴者衆モ皆然訓也  
忠の假字三三代實錄十三の、鳥冠礼比ササニ、宋礼角々  
耶

書紀大已貴命與少烹名命戮力一心經營天下復顯見  
蒼生及畜產則定其療病之方少多世人病又

御可おも庄司おうじ。庄司おうじの如ごと。新田社田嶋家にいだ小久明親おき。御可おも職贈しょくぞう古事  
 徒教書とくきょし。御可おも大庄屋おほやの類たぐい。御可おも御士ごし。御可おも御士ごし  
 冠かん。幞頭はつとう。又通とも。裴子ひざ。御可おも首くび。  
 トコトコ讀よ。御可おも。御可おも常つね。御可おも諾な。御可おも頭巾とうきん。御可おも  
 加か。御可おも山さん。御可おも石いし。御可おも見み。御可おも色いろ。  
 翁那おきな。御可おも冠かん。御可おも被かぶ。御可おも中なか。御可おも任あた。  
 髮搔かみそり。御可おも僕わらわ。御可おも櫛髮膚耐くせん。御可おも耳みみ。御可おも鼻はな。御可おも  
 案陰おんいん。比事ひじ。御可おも文割ふわり。常つね。任あた。御可おも未條みじょう。什物じぶつ。御可おも明律めいりつ。御可おも  
 引ひき。御可おも身み。御可おも真ま。文割ふわり。事こと。續つづ。徒たう。御可おも所ところ。  
 甲こう。日本望にほんむけ。御可おも芳こう。御可おも新羅しんら。御可おも蘇そ。御可おも郁いく。御可おも  
 同ひと。御可おも又また。御可おも幽郁ゆいく。御可おも香居こうゐ。御可おも或ある。芬芳ふんこう。御可おも或ある。馥郁ふくいく。御可おも  
 邪あく。御可おも假字かじ。御可おも三代寶鏡十三の。御可おも真愛禮まうれい。御可おも中礼ちゆうれい。御可おも  
 曹さう。御可おも書か。御可おも紀き。御可おも大だい。御可おも貴命きめい。御可おも與よ。御可おも生う。御可おも名命めいめい。御可おも戮力じきり。御可おも一心いっしん。御可おも經營えいぎ。天下てんか。復頭ふくとう。見み。  
 老お。御可おも生う。御可おも死死。御可おも產う。御可おも則定そくてい。其その療病りょうび。之の加か。少すくな。世人じんじん。病び。愈ゆ。

傷ソコヒを治ヒツクめと治ヒツク多ハシタセ、セ、此神の恩ミツシム頼リクセ仰ヨウス。如事シノコトあ  
事シノコトも出ヒツクる。身ヒトコトの病ヒツク又アリ傷ソコヒ痛ヒツク。傷ソコヒ痛ヒツクを  
自ソコヒ知ヒツク。傷ソコヒを速ヒツクきく驗ヒツクる。幽ヒツク界ヒツクの靈ヒツク。傷ソコヒの靈ヒツク。賜ヒツクりま  
人ヒトコトを中ヒツク。己ヒツクが所ヒツク。一ヒツク心ヒツク以ヒツクて理ヒツク事ヒツク漏ヒツク。漠ヒツクの放ヒツク用ヒツク。病ヒツク  
も何ヒツクも治ヒツク。事ヒツクとすれど、漢ヒツク乃ヒツクも上ヒツク代ヒツク。理ヒツクニ泥ヒツク。古ヒツク人ヒトコト  
伏ヒツク任ヒツクせてせり。若ヒツク小ヒツク験ヒツク。一ヒツクもりし。自此神ヒツク靈ヒツク。古ヒツク人ヒトコト

○類聚雜要 檢數 口上 はすと數をもる  
足りぬ事ある。かくかども新舊本経よ際とあれかくともあらう  
頭廻云世傷よキテハモハシムレモカハ初うんと多き事ナリカヒニ  
緒布の破れをも直くもあらうとウツモレハツカヒニウツモレハツカヒニ  
加テモ作れハレバツカモキテカツモツカツモス足カヒトモエヌミ  
キテハモハモハモハモハモハモハモハモハモハモハモハモハモハモ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホホ  
ホホホホホホホホ  
ホホホホホホホ  
ホホホホホホ  
ホホホホホ  
ホホホホ  
ホホホ  
ホホ  
ホ  
○

万葉集に曰く「仙寃物は坂うち東メ詣國の男也春元  
閑時秋來並ひあれ飲食とあらまえ遊び樂ひうつてし常湯  
風を記す筑波山の祭日男也集角一和鏡を贈焉し婚とす  
是とぞ耀致と云ふ煮の内傍レシテ故娘とり事仕合へし  
移風國凡そ化すヨリモト  
詠き映る事あればいざやなと目小變る味也  
眞生考之傳國もももうじき事と云ふれど然知る所

卷之三

日暮報は傍（よそ）の事（こと）、あら集（あつ）東（とう）の事（こと）多（多く）、ゆく場（ば所（しょ）の事（こと）、  
の傍（よそ）とて事（こと）多（多く）、名階（めいかい）五（ご）六（ろく）七（しち）八（はち）九（こう）十（じゅう）を、守（まへ）し易（やす）て事（こと）多（多く）り  
、軍防（ぐんぼう）会（かい）の兵（ひょう）士（し）守（まへ）邊（へん）者（しゃ）、名階（めいかい）人（ひと）よきを、遠（とほ）征（せい）以（よ）來（き）  
、其（その）をきよらへて、又（また）兵（ひょう）士（し）守（まへ）邊（へん）者（しゃ）、名階（めいかい）人（ひと）よきを、遠（とほ）征（せい）以（よ）來（き）  
、向（むか）者（もの）名階（めいかい）士（し）と、又（また）兵（ひょう）士（し）守（まへ）邊（へん）者（しゃ）、向（むか）京（きょう）一（いっ）年（ねん）向（むか）陽（よう）三（さん）年（ねん）よきを、  
有（あ）其（その）以（よ）來（き）、又（また）兵（ひょう）士（し）守（まへ）邊（へん）者（しゃ）、向（むか）京（きょう）一（いっ）年（ねん）向（むか）陽（よう）三（さん）年（ねん）よきを、  
東（とう）鑑（かん）志（しおり）都（とう）大（だい）番（ばん）係（けい）事（こと）、抽（ひき）誠（じゆう）勸（けん）之（の）由（ゆ）、有（あ）  
の大（おお）事（こと）と、其（その）事（こと）、御（ご）從（つづ）半（はん）官（かん）屬（ぞく）すかうすす、是（これ）て期（とき）、上（あが）りし、下（くだ）りし、而（が）て、  
力（ちから）を、有（あ）し可（こな）れ、且（よし）て、自（じか（か））、義（ぎ）を、首（くび）仰（あお）せ、且（よし）て、  
子（こ）じと、故（むか）國（くに）、有（あ）り、也（や）、修（つく）して、三年と、二（に）四（よん）年（ねん）つ、而（が）て、隨（つづ）て、又（また）  
、其（その）を、もと、もと、賴（のぶ）朝（あさ）の時（とき）、行（ゆく）事（こと）、もと、もと、  
也（や）。

造者と云ふ酒司式祭神九座の内大色刀自小色刀自引今西と  
ゆきと一讀草事。造酒司の大きさは丈八尺、重さも  
小豆二廿石入。三疊屋の外に大風を被司倒れて打倒れちりて  
太嘗新嘗式八重疊の上に立て板柱と云ふ式子料編薦一枝  
生絲一両と乞められ。薦板也又或玉帛板柱と貞觀儀式子白羅草  
木島點織後御板柱とも云ふ。柱の高さにて床の上斜方板  
板柱名所よりなり延喜式長三人座更えも年刊本引合子  
又或之を今を傷板柱也と云ふ。復次て云々

歴史の筆者どもどうぞお手の節をうて土本と十二月五日

山槐記三月成鄉食用櫻膳故實也櫻膳者三方其上置食器

所醸之酒亦氣味不及于日本。然則以日本之秈米，置良醧可為天下第一。云今搗之以天工開物，又南有酒比白糯米所為者也。稻記不稻謂之大師古造粉宜用小師古之水，方能得之。穉謂之小師古仙謂之紅絳米醸酒，宜用大師古陶，陶明之酒，多是稻也。勝者北也。稻之宜之事也。後漢書曰：「水之於蠶，粟之於蠶，莫可用也。」我邦粳之勝者北也。○古備の國，方言集より也。宜謂之備後國，之國之國名也。名之云矣。法女達の妙也。初則人否酒，次則國否酒，後則酒否人也。是

○世間の童子と子供達の音をうるさく思ふと、有名物の  
造酒司と云ふ事である。○鱗也立成の鳥と云ひて訓せり。あざやかな  
書也。○鰐字としは舊名鈎。魚銘引に又俗用。鰐字非也。○或言魚也。  
其字遇臘魚也。○朝鮮の鮭魚と。東醫寶鑑に著。刺身の年  
その肉片を刺身でもとる。○日本が花魁あるとて、東大寺の御室の  
賀屋屋代祭日乾鮭と太刀をもと。牡牛と呼んで一條の大路を過ぐとする。  
而れば是も太刀。○東坡志林に僧謂酒為般若湯  
魚為冰後花。雞為鑽竹難菜。有為不義而文之以美名與此何  
異と乞ひ狀方子ても、更て二者と。鮭と刺刀と。翫と首座也。  
聖魚と擗鉤と。數珠木と。猩汁鵝爐等の在り。○  
○直隸考。手巾、鰻、云々又八目燈や又。蘿卯と。眼鏡と。章魚と。天蓋  
其外近世雅名。○

東鑑子去文子之多所領之他子遣子券書二條爲氏子冷泉  
爲相子許子備摩國部都元子子子子子子子子子子子子子  
今子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子

延喜式神服女五年分左右青摺衣日薄鬢髮男女各執酒柏木  
色也柏葉用圓籠之此名起也後又上云之是也  
呼之勿勿。○三祭礼ト柏酒の神事ナリ酒立ト子  
○モラウ  
升籠トシテ木丸の音と名とある。竹籠トシテ御用也。宝器  
考案も、木丸のせらう。御用也。是を正し。故と云是  
又先帝也。僧の事で、心をもよへせ。事擇集抄に云う  
自然東岸居士稀。身する。碧敷トキ。升籠トモ。先帝也。  
唱演也。是今之そらす。其祖と云ス空也。通て行者又ももと云  
ソラトシテ。そら。無から。升籠。魏古。此を拾ふ事。今も  
瓢も。すらと。被て。左笠も。竹籠。りむる。平定盛  
室也。其羅。惣い。羅髮。降衣。方々。ひし。後。そく。  
石。代。舟。小。似。物。被け。○神華良能。少。翁。翁。事。事。刀。也  
遠里少。也。近。也。吉。也。那。也。ら。村。也。

廣子の指揮の如きあつてもうう。呉服尺の裁縫尺の知張短の器を  
曲尺と名づけ。依るに之は深筒く。乳母代介と云ふ指揮の如き。  
日本紀子城とある。韓語へ。○錢の索子アス。刺の毛と繩もあり  
出南ウミモサ群落ア角。○勇者中アコトアシ。小虫の毛をもべ  
鶴名柳ニ。鄉セ子ア訓セ。酒醋カ上の水を飲ムこと。酒セ。

茶匙の者にてて薬匙ともより。西土の湯匙は考工鉄勺に造制こと  
より蓮の葩の形とす。この象牙の茶匙を玉搗とす。左寺右寺ゆえ  
也と。古瓦遺物り山城國。

延喜式の鷹羽を訓む指羽と萬葉集下に「鳥羽御子也」と君指號  
ある二上山の鷹子も又どうりとあり、仪式帳より紫刺羽二柄官刺羽  
一枚勿シ有て廣韻より、駁羽ハ羽葆也と云々、長柄の大圓扇三枚持て  
之の如れハ五石弓也。鶴軋島から名と乃望風之意也。而其を論  
齊人字て雀唐子と云々、其子也と云々、而其子也と云々、而其子也と云々、  
レソ隋書は海東青と云々、毛色之の差羽、尾の毛色也、うら毛  
黒毛に白毛す、以後子孫の毛色を有す者也、赤毛、白毛、黒毛、

折衷を以て事より補多の折とすと折てゆくをとて傳名鉄子奴  
補多の事よりのことを訓せり又緒序補多とぞとての至りて也せよ  
事を五歳の頃の事より但侍萬葉四時性其事はヨ准して草すれ  
度西ニ申り事より事より事より事より事より事より事より事

矩角と四方の形と割とつたる物を略して今も曲尽とあつておら  
うと訓あるが目と算法勾股弦とつて是と云ふ事と  
太く折れ曲がりの木をいふが造りは勾股弦の矩

レーベルを付ける。天盃と土器を以て天盃の圓を以て  
入して筆を取る。その土器をさすがに「レーベル」の如きよ。すこし  
それと並んで今更古物を以て筆を取る。

金子の上に鑑と  
銅又鉛とあり  
金子の上に鑑と  
銅又鉛とあり

傷名録は總てあり、抑柄川義賢の御手とほり又屈木為之と云ふ  
弓子の事より此盈れと申す。今も東國の民間に世襲の雨器をと  
叔首岐の毛人かく叔首うち也。今ニモトニササハシ似る。

天一神とよてり。おまぐれい神と。おまの阿律智とよむ。俗に何事

極意致す。よどぎもにあらへき、ときも活潑而強き筆の如く、  
にゆき中央事と云ふれ方、御内閣ヲシテひそかにちよて御三事  
婦の嫁三子を限らず也。ハニシテ、島津の主こと方義  
左太衛門うみをさむれにて、医元人りしとおめひとす同士、宮は  
坐もうの名傳手し決定のまことう。仁明天台王の墨也。

卷之三

續日本紀承賜之額也見えり額と云ふと云ひて定額也或されば  
今より額と云ふ事あるべし

聲々帝血滿衣般とぞ。杜鵑一名山茶花。山城乙訓。白神樂。并峰雪人。大夢の品也。

萬事集の見本、鐵石舗の纏で、三才圖會の板網などです。小手袋  
をつけて、しめつけたての手を、鐵石舗の半疊舗と、半疊舗の小手袋  
をつけるのを、萬事集です。

聰<sup>カナシ</sup>て<sup>シテ</sup>し<sup>シテ</sup>賢敏<sup>カナシ</sup>の<sup>シテ</sup>事<sup>シテ</sup>一説<sup>シテ</sup>梵語<sup>シテ</sup>薩埵<sup>シテ</sup>俗<sup>シテ</sup>自<sup>シテ</sup>聰<sup>シテ</sup>ト  
リ<sup>シテ</sup>ア<sup>シテ</sup>第<sup>シテ</sup>事<sup>シテ</sup>情<sup>シテ</sup>ヒ<sup>シテ</sup>ム<sup>シテ</sup>ナ<sup>シテ</sup>レ<sup>シテ</sup>解<sup>シテ</sup>シ<sup>シテ</sup>詳<sup>シテ</sup>古<sup>シテ</sup>色<sup>シテ</sup>失<sup>シテ</sup>

新郎の三日を以て新婦父母の家とて五難禮畢後、  
今日より終りトモス。

○譲岐馬頭山の名を改め、伊勢守に奉りて、  
其の子が馬頭山の名を承り、馬頭山と改めた。

翻意より。指の跡味をもつて、必ずあるべき。其本意は是の歸田録に凡百十種以上二種植置其中則紅熟爛如渥而可食土人謂之燐柿也。タマリノミツカヒトウモ有る。又御代記古事記ト刀アリ。冷の玉ヲシテ刀ヒエトシテ御代記古事記ニ有リ。モテテ。等トシテ。アリ。神代記蛇之韓御刀水井紀子拔劍入海化爲鯨。御神也。アリ。無ノ劍の古名多シ。

○金切る具足アサシとその職アサシ人アサシ金刀アサシ。○鑄アサシて高アサシい鋼アサシを事アサシ。しのうれば天工用アサシわが筆アサシあ筆アサシの事アサシとも銅アサシと。○鑄アサシて傷石アサシ鉄アサシを事アサシ。新様アサシお鎧アサシと銚アサシと。○鑄アサシてすいとめへ集韻アサシと鋪青秀アサシ鐵生衣アサシ今仕鑄アサシ。正字通アサシ鏡鑄アサシ。鏡上綠也。俗名楊妃アサシ始アサシらる。○すいと宿高アサシ。とある。老高アサシのと鎔アサシりある。同名アサシ。一。ひら様アサシの多良アサシのひら方アサシ。句子代アサシ頭尾アサシのくわらとす。先當アサシ。○鑄アサシて金剛集鑄アサシ。

日本紀子福禪とキム本草也。諸書小三枝とあるが  
通訓せり。延喜式子本草の別名にして瑞草ことなり。傷石鈔子  
葛とみ枝と相值葉お當也。姓氏錄云三葉の仲の事也。  
古事記云如三枝押齒坐と云詞あり。押齒、押葉小印也。茎も三つ  
並んで立るや。○又う手草也。子根脚の中を筋へて子を立てて立化  
する必らず中筋の名よつていへ。○古今事類有す。子は脚の三分之  
四もとえ花也。叶也。セリ也。木もみつも此花用ふる。○集義抄  
齊苑云。○一云。二云。三云。也。○神祇令云三枝祭義解。謂卒川社  
春秋三葉三葉共齊也。○神祇令云三枝祭義解。謂卒川社  
也。以三枝華飾酒樽祭故曰三枝也。○又是也。○

あやし一本の本の枝いとしくちりと落り来る。葉は  
近づく。やう福井に擬せられまゐる。本の名とて、あらゆる言事記す  
見ゆる。ある所をきき。音通ひて其名も。四月よりの風からう  
かねばくとくわづとく。○多取草抄を檜を宮木とむ。傍を  
用ひれてさいをよむ。かねばうな御とく。見えうり古今集の序。イ  
處つうじ。誤を保て。後うえし顯。胆説トミ夜ハ。モアキ。レ役  
草志。落度。花の祝。モアキ。モアモ。節と美能。○延吉草式雜樂で  
修善寺牛膝各七斤と云ふ。雅好西サ之郭。詩上一章三花爲瑞草也。  
真澄考。三枝を滌羊花。作向人三枝九葉草の名あり。世に傳承。之  
とこそ三枝多岐草。又四月花。是五色白色有房紅も有  
之。白者と云ふ。三葉あらわして。ノシハシノノ。并。佐名所。十  
物伊と羊。約一百十。の。ふ。字。ま。か。す。ま。か。す。四叶。佐名所。

定家卿壯衣束抄手左筆と云ひ馬具の色葉字類抄手竹はせと云ふ  
豹皮手作豹ありて虎豹の林木森の地子棲ぬと云ふ圖書ある  
少竹林ありとも作成と抄手と云ふされば左筆、虎豹の如きを写べしと云  
今摺筆或は筆手作とは是非を以てその色の用ひ筆アリとも右筆と  
對する左筆と名けしより官見記す、左筆ノ風韻あり地文  
虎皮て文を以て左筆と云ふ也

おれの手で手をもとめ、小朝の手をもとめ

様乱を取らひて、五の面を後もとまく所をうなづく

龜卜吉不延其式日兆行之勿

土佛傳勸名信行二夏の御子佐美即ちきみ御子也  
大神寫雷跡已前の御子也中後之傳也多々御塩殿也  
別て傳姐世記所謂佐美御子也

近江坂田郡主古事記醒居清水之日本望居醍泉  
總莫入縱他住他<sub>（本）</sub>而之本<sub>（本）</sub>而之本<sub>（本）</sub>  
與子主<sub>（本）</sub>而之本<sub>（本）</sub>而之本<sub>（本）</sub>

序文  
余は少く物をうけたるのり乏しく金聚集す  
あましけりうけたるも何事のものかよ  
うされどゆ。是を既に故より草庵年々  
實幼也。皆そりうけたるものとしとよ矣りも  
秋雲、劍道者、刀の古勒、筆の古、帽の又古  
いふ。以て古木の古色の筆、古墨の古墨、一  
かくもやむかし、劍道の古り、古室らしべし新六帖の古也  
りうき入せよ。古也。古也。古也。古也。

碑の字を碑と書くのは異説也。しは碑もてし者至り。碑  
の字を碑と書く者多し。碑の字集韻云。碑皮也。碑  
正字通。俗字舊音舌治。以誤と之らず。正字通。正  
字。後名釣目沙羅羅の形。碑の如し今ノ俗字也。正字もろ  
梵器鉢沙羅羅也。又。其子鉢沙羅羅也。石碑也。名多成  
皆。俗。西。重蓋。ト。云。薩摩。平四。鉢。云。ト。云。西。  
訓。二。毛。字。既。不。又。愈。也。毛。改。毛。更。可。也。毛。作。毛。  
樹。か。多。也。毛。

本朝式小廁字をあらへ負觀或小飾廁若行品も已來日星記  
淺廁瓦と古は是より更考ひ廁字を韻書母ノニシ式子陶里通  
廁瓦又之に破瓶の如く土と造らるゝ○式子大廁小廁山形大  
廁而之又余蓋取印張廁而之廁之廢行或也想張才心行共之  
舊山形へし○傍子子子子子子子子子子子子子子子子子子子  
百日上郡の村名子蛇字をあらへ其の故ゆゑ○方利

智名鉄子 権と申す者 体は多く品字で竹把も又う傳家の  
物のうち 當家のハ源と申すも是へては顕名をさういふ掃除の  
才根より新風字鏡よ初へ

既生馬つらぐにてより猿あひ又ハ猿も了ニ新福子  
の事也。新猿ゲ説ふるをもとで又猿の異名で馬留とシテ有り  
牧馬子猿ナキナハ馬多く斃ホトコモ何事也。馬て物も出  
シムヤ。其猿ノ愚タリトナハ多シ。すりければ其故也。又  
馬經も鹿小母猿ニ妙モ馬比疫癪ニ除ク。又宋朝

馬頭神也。其形像兩足下鶴錫と猿を踏み、兩手を劍を執る。是之を陰陽家厭鎮めむ。

○駕齋梅。さくらん。花庄論より品字多て實座論と一巻。藝花一花數實のよきもの。單重紅白の数種。又桃なり。北島參考能く。八房と云ふもどり。輪小豆々ハ結び亦奇品。根河主、房中とも。

○鎮宅靈符縁起集說 上下

○日本弘通之由来

其後世々相傳り五朝。推古廿帝齡。御宇三百濟國定。麿  
桂年聖明王第三御子琳。聖太子。吾忍。三度。毛。北法。アモ。ア  
弘。主。ノ。其後。儒佛神。モ。執行。シ。九。ト。舊。日記。彼琳。聖太子。  
渡來。東地肥後國八代郡白木山神宮寺是ナリ。

○肥後國八代郡神宮寺靈符神。日本始

肥後國八代郡白木山神宮寺ニシテ靈符尊像妙見菩薩  
昔漢孝文皇帝弘。曲長縣。坤。至。五。思。宅。豪富。左。見玉。フ。テ。ア。ヤ。シ。ミ。其主。ラ。呼。テ。是。ラ。問。玉。フ。彼。著。答。テ。姓。劉。名。進。平。ト。玄。者。ナ。リ。往。昔。我。カ。家。禍。災。甚。ニ。カリ。シ。ニ。何。あ。ヨ。リ。モ。知。テ。又。書。生。二。人。來。リ。テ。七。十二。符。ヲ。傳。ヘ。後。久。即。ケ。敬。ヒ。蒙。テ。他。修。スル。コト。十。年。ニ。シ。テ。大。富。貴。二十。年。ニ。シ。テ。子。孫。故。而。昌。三十。年。ニ。シ。テ。必。ス。白。衣。ノ。天。子。宅。入。ル。コ。ト。ア。ラ。シ。ト。云。テ。門。ナ。出。去。九。事。五。十。步。ニ。シ。テ。失。又。口。白。氣。一。道。天。升。而已。ナリ。

甚ニミ一<sup>レ</sup>是ヲ見ヒトイトモ未<sup>シ</sup>白衣ノ天子ヲ見ストム孝文皇帝  
信敬ニテ靈符ヲ傳<sup>ヘ</sup>天下ニ施<sup>ス</sup>

○八代神宮寺靈符板三重朱年正平御免事

五朝ニ靈符板ヲ用<sup>ル</sup>コトハ人皇罕<sup>シ</sup>代聖武天皇も此年  
天平十二庚午<sup>ニ</sup>肥後國八代郡皇木山神宮寺ニ於<sup>テ</sup>是ヲ梓ニ  
キリハ其時ノ板ハ宇<sup>ニ</sup>滅<sup>ス</sup>今ノ板<sup>ニ</sup>南朝正平年中ニ  
後醍醐天皇第<sup>六</sup>ノ御子征西將軍良懷親王八代郡高田卿  
御住居降梓ヲ御建立成サレ神宮寺ニ納メ玉<sup>ヲ</sup>年先<sup>ニ</sup>靈符ノ  
溫<sup>シ</sup>陀羅是ナリ

○八代細工町ノ染革屋古家ヨリ傳<sup>ル</sup>板二枚アリ一枚中ニ天平二年  
八月丁酉子妙見ノ像及ニ八幡二字并<sup>ル</sup>枕字等アリ右袖佛形  
アル故高買タ忌<sup>ミ</sup>憚<sup>フ</sup>、征西將軍八代才<sup>ノ</sup>之<sup>シ</sup>ケル時キ南朝正平  
年中別板ヲ形色<sup>ニ</sup>是ヨリ南買ノ免<sup>チ</sup>得タル故ニ正平  
御免華ト稱ス北板ニハ正平六年十月丁酉<sup>ニ</sup>有<sup>テ</sup>神佛形梵寫<sup>ス</sup>  
除<sup>ク</sup>唐草花<sup>ヲ</sup>畫ケリ諸國正平深ノ權<sup>ヲ</sup>ナリ

○八代上宮之事

神宮寺妙見上宮中宮下宮三宮上宮妙見  
本地大<sup>日</sup>如來<sup>ナリ</sup>妙見ノ號曰繆迦阿彌陀觀音地藏金剛  
藏王盧<sup>ニ</sup>宣<sup>シ</sup>爾大威德我身也<sup>種<sup>ニ</sup>現<sup>ス</sup>尼故<sup>ニ</sup>七體妙見上宮以</sup>

○伊勢國上山參者祭妙見蓋流事

神國決疑編中<sup>ニ</sup>鷲山宮參者祭妙見蓋院也妙見蓋院者度  
會姓遠祖大神至飛鳥苗亂大内人高至也大物忌子也貞  
觀元年十一月十五日沈御執身向奉<sup>テ</sup>時年郎時從御<sup>テ</sup>賀  
河淵底得妙見呈生童形像奉居尾部陵江西小田圍崎  
宮靈地以紙氏人繫榮<sup>シ</sup>尊<sup>シ</sup>尚在焉爰自觀二年十一月十五日高至  
生子一胞二男宗雄又雄是也同三年十一月十八日神  
春<sup>ニ</sup>亥<sup>ニ</sup>秋並是也同四年十月十五日亦同胞二男子生<sup>ス</sup>各綿  
主春<sup>ニ</sup>亥<sup>ニ</sup>時年任妙見尊星玉靈訖率<sup>テ</sup>氏人奉<sup>テ</sup>向清淨山

谷奉祭<sup>リ</sup>見大菩薩日光月光<sup>ヲ</sup>。宇喜山宮祭是也。子細載在宇山  
官<sup>ノ</sup>參<sup>リ</sup>祀<sup>ト</sup>詞<sup>也</sup>。據南哥宣本  
繩起而註之

○隆興但馬伊勢在靈符尊事  
奥州相馬家世以靈符尊爲本尊。參祀之。建社建於城中。  
安觀音大士像一次爲御正體。奥州記  
但馬國石原山帝釋寺日光院妙見菩薩北斗七星垂迹本地  
華<sup>ハ</sup>師如來但馬舊元

伊勢國妙見者每月廿二日緣日也。奉日常明寺此寺兩太神內  
院也。後陽成院勅額故。神宜衆中毎正月八日堂中三集り  
奉禮<sup>アリ</sup>此堂ハ中央、藥師如來左右、兩太神す。地境因、  
大倭姫壳<sup>アリ</sup>隱所マリ。依之妙見山ヨリ高源寺山ヲ折越  
常明寺山<sup>テ</sup>隱<sup>ム</sup>云々。

和<sup>シ</sup>本  
七<sup>ハ</sup>營廿十人一扇<sup>ハ</sup>居て燒<sup>ス</sup>興焚<sup>セ</sup>共<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>イ十人<sup>ハ</sup>火<sup>ヒ</sup>其  
頭領<sup>ハ</sup>火長<sup>ト</sup>火<sup>ヒ</sup>縣<sup>ト</sup>音<sup>ヲ</sup>通<sup>ヘ</sup>。縣長<sup>ト</sup>火<sup>ヒ</sup>又海舶<sup>ハ</sup>走<sup>ス</sup>  
鼎長<sup>ト</sup>火<sup>ヒ</sup>火伴<sup>ト</sup>同<sup>ス</sup>。うは靴<sup>ト</sup>。

○ウラジン

本毗那夜伽<sup>ハ</sup>譯称障碍神<sup>ニ</sup>。如來荒神鹿<sup>乱</sup>荒神忿怒荒神  
三身<sup>ト</sup>三寶<sup>ハ</sup>荒神<sup>ト</sup>アリ。其<sup>ノ</sup>謀<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>。障礙經<sup>ト</sup>アリ。俗<sup>ニ</sup>竈<sup>神</sup>ア  
利<sup>ト</sup>。久<sup>ニ</sup>不<sup>ト</sup>生<sup>ス</sup>也。佛說<sup>ハ</sup>吉事<sup>シ</sup>。又興津彦<sup>興津姫</sup>の二神<sup>ト</sup>土<sup>主</sup>神<sup>ト</sup>  
配<sup>ス</sup>。彦<sup>ト</sup>三寶<sup>ハ</sup>荒神<sup>ト</sup>アリ。古書<sup>モ</sup>アリ。但<sup>シ</sup>荒<sup>ニ</sup>火<sup>ヒ</sup>死<sup>ス</sup>。古事記  
荒神<sup>ト</sup>アリ。石凝姥天目<sup>ハ</sup>金山彦<sup>余</sup>。休<sup>ミ</sup>三百日<sup>ハ</sup>神魂<sup>ト</sup>現<sup>タ</sup>。至  
今<sup>ハ</sup>附會<sup>ト</sup>。あま<sup>ニ</sup>攝丹勝尾寺<sup>ハ</sup>荒神<sup>ト</sup>和<sup>ス</sup>。笠<sup>ハ</sup>荒神<sup>ト</sup>。  
御<sup>ハ</sup>釋氏懲<sup>メ</sup>の罪<sup>ト</sup>アリ。中世以來<sup>ハ</sup>自<sup>ト</sup>人<sup>ハ</sup>琵琶<sup>ハ</sup>鼓<sup>ス</sup>。地<sup>ト</sup>神<sup>ト</sup>誦  
多<sup>シ</sup>。復<sup>シ</sup>佛說<sup>ハ</sup>如<sup>ト</sup>經<sup>ト</sup>。夷<sup>ハ</sup>少<sup>シ</sup>。俗<sup>ニ</sup>有<sup>ス</sup>。又<sup>ハ</sup>藏<sup>ス</sup>。目<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>。まし  
う<sup>ス</sup>。源平盛衰記<sup>ハ</sup>荒神鎮<sup>ト</sup>財寶<sup>ト</sup>。阿波<sup>ハ</sup>也。又<sup>ハ</sup>院天<sup>ハ</sup>也。も<sup>リ</sup>。  
即<sup>シ</sup>吉尼天<sup>ハ</sup>邪法<sup>也</sup>。或<sup>シ</sup>重貴<sup>也</sup>。孤天王<sup>ハ</sup>也。又<sup>ハ</sup>足陀院祖尼也。

行尾、孤尾<sup>ハシモト</sup>、多々<sup>タダカ</sup>福天神<sup>ハクテンジン</sup>其祠<sup>ハコニ</sup>有<sup>リ</sup>、著<sup>リ</sup>御集<sup>ミツシテ</sup>

獨川<sup>ハタケ</sup>の西一條太<sup>ヒロ</sup>の南小河<sup>コガ</sup>是<sup>アリ</sup>

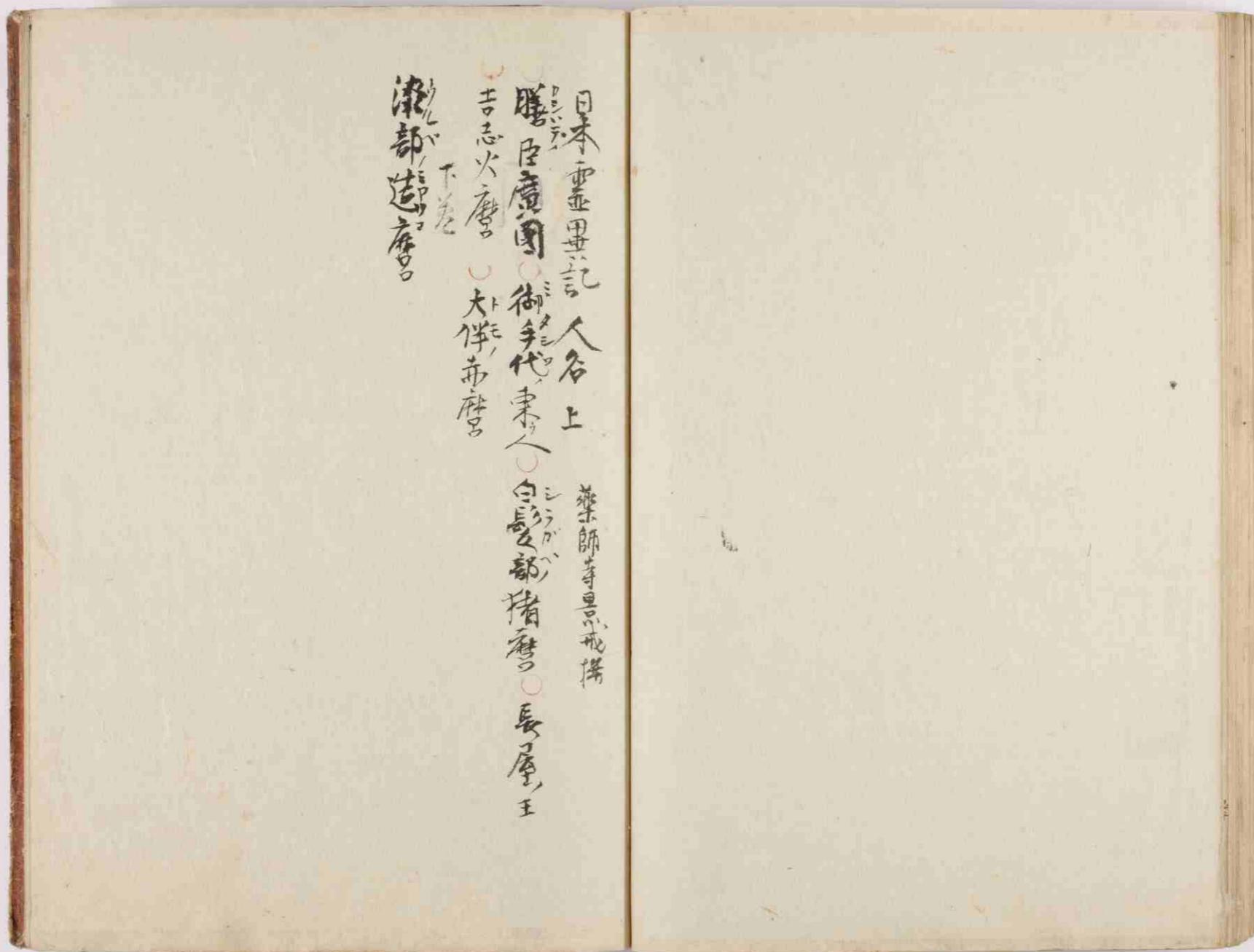
○鉢 新様字鏡鑊又鉢<sup>モミヨリ</sup>唐<sup>カタニ</sup>鑠子<sup>ミツコ</sup> 鏠子<sup>ツルコ</sup>

新様字  
鏡鑠子  
唐鑠子  
ツルコ

○詣羽神

日本書紀通證六神代下卷三章云、尊良國兒屋太玉

二神者、左輔右弼之靈故亦曰<sup>吾孫</sup>奉<sup>上</sup>廟<sup>モウ</sup>正<sup>マサニ</sup>通<sup>マサニ</sup>曰<sup>也</sup>  
亦降而以清明正直為<sup>レ</sup>守護天孫也。今按駿河風土記曰、  
薦河郡諸羽神社所祭天兒屋恨命天太玉命也。諸和<sup>也</sup>  
蓋而翼<sup>ハタハタ</sup>輔佐之義山城國宇治郡諸羽神祠在<sup>也</sup>  
諸羽山神處所傳亦同



佛神感應錄序 寂室永維赤本集古歲鐘中濟

湖東學士麻子訓行沙門 幻翁祐頼比華題

十一  
卷一

富士山はよ富士山夜と涌出もとより是紀孝正史ニ八月をもて建仁年常庵  
 樽井西富士記と及羅山子の富士記と並々今至七代春元帝即位年  
 菩薩湖開て富士山出又和漢年表銀玉の富士出生彦安三市即位九十三  
 年庚申六月近江の琵琶湖のくもる考天帝の即位五年し矣とて  
 其間相去率一丈一年ハニこれとも年表記不外れた達のすもあれど證ひ  
 そぞくの入富士縁起と能山、日月既七嶠の第オニナリニテ天竺列傳  
 三年我朝と振東故ニ新山云本ノ般若山と萬葉と云ふ説也其名  
 飛来山等本傳有と云同云譲也延暦年中ニ天神降つて能山也  
 乎も另しスル此山と名づくと云ひ然作也。革山の号すをト万葉集支那  
 疎解之不詳也。それによひて又都良香が富士記より誦出の事と云ひて  
 事云々山の事本ノ脚本ニ小山町土佐二村とあると了本モ平地可レシケ  
 延暦二十一年三月雲霧霧晦冥寫す十日足而後降り益雨の遅  
 けじとす土師高岡が新山と名づる疑義云々由ニ又其の名作也

天地より仰り御坐あつて云々て在御ゆらうと心又大前記録所の記載宣化  
天皇の御出殿と云ひ如く黒鏡一區も涌出の事無を冠し後世傳承す  
内蔵

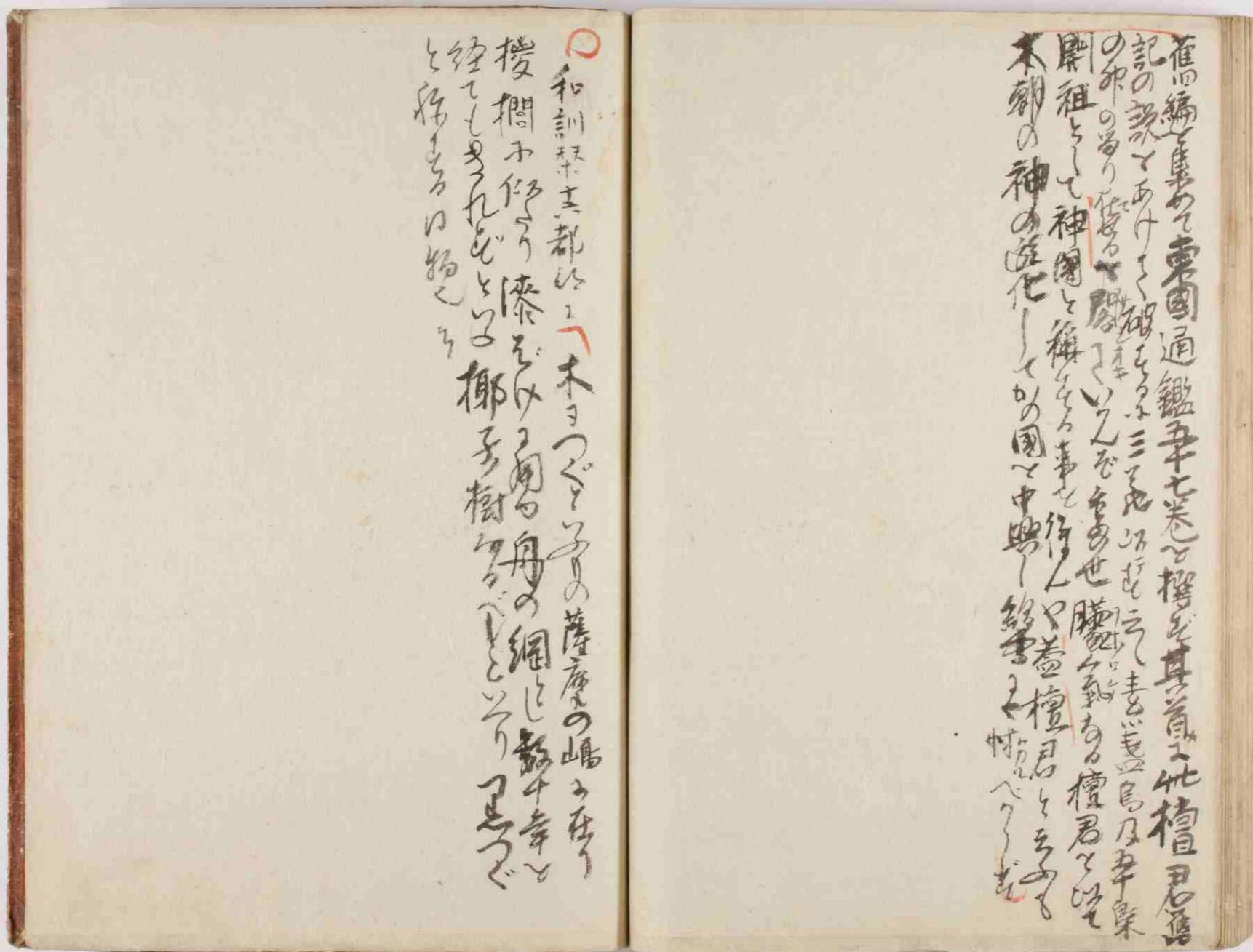
通鑑云、周襄王八年正月小宗國子隕之五。左傳子產曰、子產之死也、  
又夫余始自王卅六年小東郡に隕。又云、前漢時梁國子隕。又  
朝鮮史記云、高麗襄王文宗の時、黃州子隕石あり。聲雷電如  
四人呼之。前漢の孝武帝時、石雍州に隕。三百里を聞。前漢書  
徐生注云、後漢書云、石出此也。又云、又筆談云、雷斧雷楔ノ事也。子  
雲子房ノ事也。因縁集云、極月大星の時風狂て多々

一七四丁  
者周此玉舞五亥神現せ毫毛大公陰謀  
アシタモトニ風神を飛廉  
青女セイナの君とほし藤六の雪と悲淮南よりありて

雪の夜あかとらむるケン  
幽怪録より  
玄冥神の木に至り回録歩の大  
決心をひきうけまく岳瀧の大山の嚴林樹區を走る  
生れうる鬼邪あくとらむるカ

卷之十七

日本朝鮮神國論辨焉事と云ふ事也  
東云亞ト五國の都、朝鮮も神國ト云々ソウルも然る事也  
ソラムく東方初君長也、神人ナリ、檀木の下サ降ル國人  
立テ檀君也、國を朝鮮と號ス、是唐堯成康の歲也、墓蓋  
モホシ。千年、年也、無シ。無シ。無シ。無シ。無シ。無シ。無シ。  
之の事也。是朝鮮舊説の一說也。朝鮮大唐  
城は是と信也。本朝れ更ニ考仰し。伏見郡  
弘文館の徐居正等の諸學士有り。而も朝鮮の方中



實 真年の事 集合月次卷

夏の元年めどり不月を以て生れし日中の名を  
復奏と一いとひ一玉春集の名を  
以てあまきも復奏と復奏の名、

正徳二月廿五日 聖庵法華

十首和歌

松残雪

手のぬく松毛を身の毛見る

高柳

社頭祝

手のぬく松毛代ノ神而一

毛毛繩のうへん玉枝多理

手のぬく松毛のうへん玉枝

和歌子

公福 西三葉大御言

